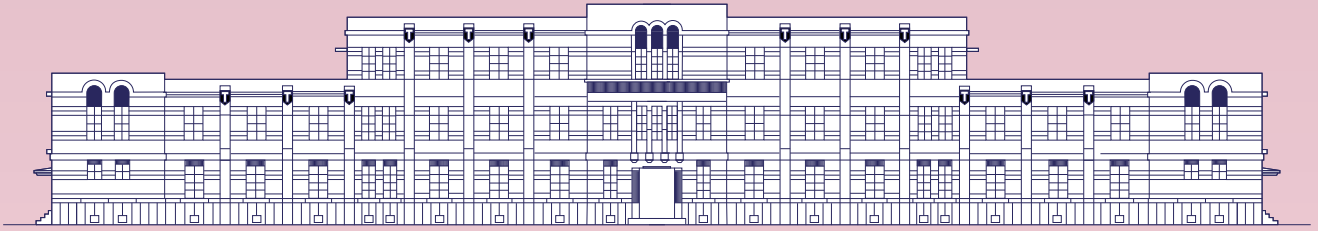


熊本大学六十年史 別編
特別座談

学生生活の記憶



熊本大学六十年史 別編
特別座談

学生生活の記憶

特別座談 学生生活の記憶

はじめに

熊本大学が発足して60余年が経ち、現在では本学出身者が数多く勤務しており、それぞれが自らの視点で大学の移ろいを見てきた。そこで、本論では、各年代の本学の教職員（あるいは元教職員）に集まっていただき、熊本大学における学生生活、学生像がどのように変化していったのかについて、それぞれの経験に基づきながら語っていただいた。

なお、座談にあたっては、次のようにテーマ設定を行った。

【座談内容】

1. 勉学（授業、教員との交流、研究室活動）
2. 学友とのつきあい（学友会、自治会、クラブ、サークル活動、映画・マージャン・パチンコ等遊興、ボランティア活動）
3. アルバイト（生活費、主たるアルバイト先）
4. 住まいと暮らし（下宿・アパート・寮、通学手段、食生活、ファッション）
5. 情報化社会（パソコン、携帯電話、ゲーム機器、学生証・履修届、単位取得確認・成績証明書、レポート、卒論等、メール）
6. 国際化（海外留学、海外研修、国際学会への出席、留学生との交流）
7. 就職活動（就活時期・就活方法、専門学校・就職講座）
8. トピック（大学祭、大学紛争）

同時に、座談にあたっては次のように時代区分を行い、それぞれの時代に学生生活を送った諸氏に語っていただいた。

【時代区分】

1. 開学期
2. 60年安保
3. 大学紛争
4. 共通一次
5. 教養部解体
6. 法人化

各時代の状況について概説すると、以下のとおりである（なお、60年安保と大学紛争については座談では分けているが、本項では合わせて記す）。

1. 開学期

戦後の学制改革により、1949（昭和24）年5月31日に新制国立大学・熊本大学の設置が認可された。熊本大学は、熊本医科大学・第五高等学校・熊本工業専門学校・熊本薬学専門学校・熊本師範学校・熊本青年師範学校の6つの旧制官立学校を母体としており、法文学部・教育学部・理学部・医学部・薬学部・工学部の6つの学部が設けられた。男子2,250名、女子83名の計2,333名の志願があり、9月1日、男子1,091名、女子63名の計1,154名が第1回生として入学した。

2. 60年安保から大学紛争まで（学生運動の時代）

1959（昭和34）～1960（昭和35）年にかけて、いわゆる「60年安保闘争」があった。これは、国会議員・労働者・学生・市民等による一種の反政府・反米運動であり、背景としていわゆる知識人の指導があった。この頃、新左翼が誕生したといわれている。その後、1962（昭和37）年にキューバ危機、1964（昭和39）年～1975（昭和50）年にかけてはベトナム戦争と、世界的にも大きな事件が起こっていた。1968（昭和43）年1月、エンタープライズ号の佐世保寄港をきっかけに、反米・半核を掲げた佐世保エンタープライズ闘争が起こった。この頃から学生運動が大きく注目されるようになり、1969（昭和44）年1月には、東京大学で学生に占拠された安田講堂に機動隊が突入するという事態にまで発展した。この影響により、同年の東大入試は中止されている。また、この前後から全国の大学で学生運動が激化しており、本学においても、大学生協側が水光熱費の大学負担を求めたことをきっかけに「熊大紛争」が起こった。こうした学生運動はその後、1970（昭和45）年のよど号ハイジャック事件、1972（昭和47）年の浅間山荘事件、日本赤軍によるテルアビブ事件等へもつながっていった。こうした1970年代に続いていく闘争は暴力抗争、暴力闘争という形をとったため、大衆や知識人の支持を失っていったといわれている。

3. 共通一次世代

1970年代後半に入ると、大学紛争時のような騒々しさは大学から消え去った。この頃、大学の進学率が35%を超え、いわゆる「マス化」の時代に入っていった。1969（昭和44）年段階では1,255名であった本学の定員も、10年後の1979（昭和54）年には1,605名まで増加し、受け入れる大学生の数が大幅に増えた。

1979（昭和54）年1月、国公立大学の入試に「共通一次試験」が導入された。これは、従前各大学が実施してきた入学試験に難問・奇問が出題されるようになり、受験者側を悩ませていたためであった。しかし、共通一次試験の導入は受験産業の介入という事態を招くことにもなり、受験戦争が深刻な社会問題となった。こうした時代を背景に、「まじめだが、想像力を欠く」「覇気がない」等と、大学生像が大きく変わったことが新聞等で盛んに報じられた。また、この時期には大学生の国公立大学離れが進み、1982（昭和57）年度入試では、国公立大学合格者の約1割で入学辞退が起こっていた。その後、共通テストのあり方の改革が模索され、1987（昭和62）年に受験機会の複数化が、1990（平成2）年には新テストとしてセンター試験が導入されるなどの制度改革も行われた。

この頃の本学にはいまだ大学紛争の名残があり、いわゆる「生協裁判」が続いている状態であった。同裁判については1979（昭和54）年12月の評議会において和解に応じることが決まり、1980（昭和55）年2月から1984（昭和59）年10月まで21回にわたり協議が行われ、和解が成立した。

4. 教養部解体前

1980年代後半から我が国はバブル景気に突入し、これに伴い大学生の生活環境も大きく変わった。同時期は第2次ベビーブーマー世代が大学進学する時期と重なっており、国公私立大学の定員が大幅に増やされ、大学進学率が年々上昇していくという状況で

あった。この時期は、大学進学率の高さに加えバブル景気の後押しもあり、学生の就職率が高い、いわゆる「売り手市場」の時期であった。

1990年代に入り、市況も落ち着きを見せ始めた1991（平成3）年7月、文部省は大学設置基準の大綱化を発表した。これにより各国立大学では教養部の解体が進み、本学においても種々議論が重ねられた結果、1996（平成8）年度をもって教養部が廃止されることとなった。

5. 教養部解体以後

1997（平成9）年4月、教養部の解体により本学に大学教育研究センターが発足した。この頃になると国立大学の独立行政法人化の議論も見られるようになり、教育面だけでなく運営面においても、大学を取り巻く環境が大きく変わろうとしていることを感じさせる状況であった。

バブル崩壊に加え、1997（平成9）年から翌年にかけてのアジア通貨危機や大手金融機関等の相次ぐ破綻等により求人数が大幅に減少し、これに1996（平成8）年の就職協定廃止の影響等も重なって、大学生の就職は厳しい環境に置かれた。こうした状況は学生の生活や大学での活動に少なからず影響を与え、前述の教養部解体という大学の状況ともあいまって、大学生のあり方がまたひとつ変わった時代だといえる。

6. 国立大学法人化後

2004（平成16）年4月の国立大学の法人化により、大学の組織・運営方法に変化が訪れた。その1つに評価制度の導入があり、学生が教員や授業を評価する時代へと突入した。本学では2004年後学期から授業改善のためのアンケートを全学的に実施している。

近年、「情報化」「国際化」がますます進み、もはや学生1人に1台のパソコン等情報端末機器の所有が必須の時代となった。電子辞書や電子ジャーナル等の登場により、学習・研究の方法も大きく様変わりしてきている。また、既に1990年代後半頃からの携帯電話やメール、SNS等の普及により、学生間あるいは学生・教員間のコミュニケーションのとり方にも変化が訪れた。

第1回座談会

平成25年6月24日

15:00~17:40

工学部1号館応接室

【第1回出席者】

- 出口 俊雄 (1949年入学、元理学部教授)
松本寿三郎 (1951年入学、元文学部教授)
山本 哲郎 (1967年入学、生命科学研究部教授)
佐田富道雄 (1970年入学、自然科学研究科教授)
深町 公信 (1976年入学、法学部教授)
宮瀬美津子 (1977年入学、教育学部准教授)
甲斐 広文 (1979年入学、生命科学研究部教授)
福本 哲也 (1979年入学、先端研究教育拠点推進ユニット長)
大坪 志子 (1991年入学、埋蔵文化財調査センター助教)

【司会】

- 古島 幹雄 (1972年入学、理学部長・60年史編纂室副室長)

1. 開学期

古島——皆さん学生時代の頃、やはり学生運動とかそういう、当時の社会情勢と、学生生活の推移っていう、密接に関係した部分があるかと思います。私たちがよく知らない1960年、安保以前っていうのは、まだ学生運動とかも知識人が結構やってた運動で、70年の闘争とは違って、また違う雰囲気があった。出口先生、その頃ちょうどよくご存じかと思われます。熊大の学生さんっていうのはどういう生活でしたか？

出口——我々の世代っていうのは、学制改革の波に乗ってやってきているんですね。旧制の5年制中学に入学、そして3年生の時に終戦を迎えたんです。そうして、5年生になると卒業ということで就職する人、旧制高校、専門学校、師範学校に入学する人もいましたが、この時期学制改革で6・3・3制が実施され、3年制の新制高校ができて、新制大学を希望するのであれば、この新制高校を出た方がよいとのことで、旧制中学5年生から新制高校3年制に

編入しました。1年間在学して、新制高校の第1回卒です。入試につきましては、入試以前に全国的に実施された大学進学適正検査(昭和24年1月31日)を受けました。新制熊本大学が正式に発足したのは昭和24年5月31日ですね。

松本——あったあった。

出口——この適性検査は何年か続きましたね。この検査を受けた後、5月発足の熊大の最初の入学試験は6月15から17日なんですよ。更に2次募集もあったようでした。そして第1回生の入学式は同年9月1日に行われまして、随分遅れた入学式でしたね。理学部(甲)¹入学生の中には、新制高校1回卒業生のほかに旧制高校、専門学校からの編入生、軍隊経験者、更には大検で大学受験資格を取得した若い入学生もいましたね。9月入学ですから4年間の大学生生活が正味3年7ヵ月しかないんですね。ところで講義は単位制なものですから、入学後の教養科目の講義では夕方まで補講があったように思います。当時の授業料は年額3,600円でしたから、月額にすれば300円ですね。したがって、入学初年度の授業料

が少なくて済んだようでした。

古島——300円っていうと、今で言うほどのくらいですか？

松本——今で言うと、相当の値段でしょうね。

出口——「我々は3年半分しか払わんでいいんだぞ」とか言っていましたよ。その代わり1年の教養科目の講義では補講が多かったように思います。いよいよ教養課程の講義が始まったわけですが、私ども理学部甲入学者は、教養課程では、今の五高記念館ですね、あそこでずっと過ごしたんですね。そして2年次になって希望した化学科に配属。今、重要文化財で残っているあの化学実験場で化学科は卒業まで過ごしたんですね。その後黒髪南地区の工学部の東に移って来たんですが。

古島——当時、食事とか、食堂とかは？

出口——自宅から自転車、汽車、電車で通学したり、また下宿した時は自炊をやったこともあります。米を炊いて、味噌汁を作る。その中身は子飼橋の近くのね。

松本——子飼商店街じゃないですか？

出口——そうそう、そこで野菜等を求め、おかずを作ったんですね。まだ、学食なんてなかったです。

古島——昭和何年頃ですか、それは？

出口——昭和24年です。昭和24年の9月1日入学ですから。

古島——授業とかが終わった後に、何されてたんです、皆さんは？



出口俊雄 (1949年入学)

出口——最初の方はさっさと帰っていたような気がしますね。まあときどき、図書館ね。私の入学した頃は、旧制大学の最後の進学予定者である五高の3年生

が在籍しておりまして、この人たちのクラブ活動っていうか、山岳部がありましてね。この山岳部に入り、島崎の岩場に…。

松本——石神山に行きよったですね。

出口——そうそう、あそこで岩登りの練習をしましてね。阿蘇の高岳に1回だけ行った記憶がありますね。

古島——五高生と一緒にだったって、五高生と喧嘩とかしたことはないんですか？

出口——喧嘩はしませんよ。

松本——先輩ですから。

古島——どういうつきあいをされてたんですか？五高生とは。

出口——クラブ活動なんかで、先に申したように山岳部でいろいろ指導してもらったりしておりましたね。

古島——そこはこう、「同じ熊大」という感じでおられたんですか？

出口——いや、同じ学内で過ごした五高3年制の方々は旧制大学の最後の学生として進学される方々です。なにせ一緒に過ごした期間が約7ヵ月で短かいものでしたから、大先輩という思いは持っていましたが、つきあいは少なかったような思いがあります。

福本——五高の学生さんと、先生方が入られた頃っていうのは、勉強する場所は全然別なんですか？

出口——科目によって違いますけどね。旧制の大学に受験があるでしょ。で、そのための補講という意味もあったのかもしれないけれども、ある学科になると、2~3人一緒に講義を受けたこともありますね。

福本——生活の場っていうのは全然別々ですか？

出口——新入生で寮に入ったようなものおったような気がしますけどね。

福本——五高の方と熊大に入った方が、同じ寮生活をされていたっていうのは？

出口——あると思いますね。私はもう、熊

本の出身なもんだから、家から通うとか、下宿をね。

古島——当時はどんな遊びをされてたんですか？

出口——遊びというと…別に、マージャンとかパチンコとか。ボランティア活動はしたことないですね。クラブ・サークルは今言いましたような、山岳部に。だけどこれも、2年から実験がありますんでね。この実験で遅くなることが多くなりまして、1年ぐらいで辞めてしまいましたね。

古島——勉強が主体っていう感じだったんですか。

出口——そうですね。私ども先輩を持たなかった1期生たちは、今後続くであろう後輩のためにも頑張らなければとの思いを持っていたように思います。アルバイトでは家庭教師なんかをやっていましたね。戦後の停滞した経済状態の中であって、卒業期を迎えた私どもにとって就職することは困難を極めていました。ただ、中・高の教師への道は多少残されていたように思います。全員定職にありついたのは卒業後でした。

山本——6.26水害は、先生は研究生の頃ですか？

出口——ちょうどそのときは研究生として研究を始めた時です。あのときはよく降りましたね。大学から子飼駅まで帰る時ずぶ濡れになったんですよ、傘はさしているけど。その頃私は田舎から汽車で通っていましたからね。やっと帰るのは帰ったのですが、明るく日は一時汽車が通りませんでした。汽車が通るようになって登校したら大江付近にお住まいの恩師の先生方の床下には、水の引いた跡いっぱい泥が溜まっていました。そこで化学科の友人とこの泥出しの作業をすべく2人の先生のお宅を廻ったことを思い出します。

福本——掃除？



水害後の熊本大学周辺の様子

出口——はい。主に、床下いっぱい溜まった泥の排除の仕事でした。

古島——結構その当時は熊大生もボランティアでいろいろやってた。

出口——僕らは学科の友人と一緒に水害に遭われた学科の先生方の御自宅の泥の排除等、早くお住みいただけるようにと何回も訪れたと思います。

古島——松本先生、同じ世代を過ごされたということで。文系の。

松本——私は3回生ですね、私は山鹿の方ですね。家から通えるというので、最初は1年間ぐらい家から通いましたよ。そして、そのうちにだんだん横着になってですね。米を持ってきて、友達と3人ぐらいで、一里木の上の方の下宿に…最初から下宿するほど豊かなのはそんなにいなかったと思います。あとは寮に入りましたね、五高の寮に。ほとんど全学部入っておったんじゃないかと思います。そして、自炊をしているときは、昼飯は五高の寮に行っただけですね、寮生から食券を買うんですよ。寮生も我慢して食わんでしょ。そうですね、30円か50円だったと思いますけどね。

福本——寮で食べられるんですか？

松本——寮の食堂で。だから寮生とも仲良くなってですね、寮に泊まったりしました。もうその頃はもちろん、五高生はいませんからね、熊大の生徒ばかりで。3寮あってですね、一番手前は職員の方が…結

局、教員の宿舎もないもんですからね。二寮と三寮に学生がおったと思います。暇ですからね、帰ってきて、あそこの子飼まで買い物にぶらぶら歩いて行って、それであの辺で。まあサービスが良くてですね、魚屋さんとか八百屋さんとか。

古島——その頃はモノは結構あったんですか？

松本——子飼の商店街っていうのは、ヤミ市みたいなもんですから。だからもうなんでもありましたね。それでしかも、安いし。出口——繁盛してましたよ。

松本——非常に親切ですしね。売れ残りじゃなかろうけどもですね、もうタダみたいにしてくれるわけですよ。だからわかりかし豊富に食料はありましたですね。

古島——どんなものを食べてたんですか？

松本——肉はその当時ほとんど食べません。だいたい魚。肉といえば、鯨ですね。今だと鯨は高級品ですが、あの頃は鯨ばかり。

古島——寮の食事っていうのは？大学の食堂は？

松本——ほとんどカレーライス。それもですね、大体ちょっと頑張れば3杯ぐらい食えるぐらいの。だからあんまり多くはないわけですよ。

古島——当時は女子学生っていうのは結構いたんですか？

松本——恐らく学部によって違うけど、法

文の場合は2回生までは4、5人だったですかね。3回生…私のときからはですね、急に増えて20人ぐらい。これが優秀な方ばかり



松本寿三郎 (1951年入学)

りでですね。その後は大体そのくらいおるんじゃないでしょうかね。法科の方は5人ぐらいで、文科の方は85人ぐらいのうちに15人ぐらいは女性ですかね。かなり多かったです。

古島——学生運動の頃は社会に学生さんが目を向けていたんですけど、当時はどうなんですか？

松本——そういうのはほとんどありませんでした。自分の生活がいっぱいいっぱいでした。講義は大体ほとんど東京から来られる先生ばかりでですね、6月になるともう皆さん東京にお帰りになってですね。

古島——当時、先生との関係はどうでした？

松本——文学部はもうめっちゃくちゃ親密で。私のところは、先生が2人。そして学生が8人ですね。1回生が3人、2回生も3人、3回が8人、4回は10人おったと思います。五高記念館の2階が研究室で、下が講義室。

古島——出口先生は、当時先生との関係はどういう感じだったんですか。結構厳しかったんですか？

出口——いや、別に。僕が思い出すのは漱石が言うところの「師弟の和熟は育英の大本たり」。私どもも、先生のところに行ってはいろいろ話を伺うというようなね、雰囲気がありましたね。

古島——アカデミックな刺激をある程度、



1955年頃の学食の様子

先生から。やはり一歩、三歩下がって、「師の影を踏まず」みたいな感じだったんですか？

松本——意外と身近でしたよ。今言われて思い出すのは、外国語の単位をもらいに行ったことです。1人じゃいかんもんだからですね、先輩・後輩、先生によって、出身校でちゃんと連れて行く。

出口——今言ったように、先生方との交わりというかね、そういうのも、我々が押しかけて行くこともあるし、先生の方で「今日は一緒に食事したいから、一緒に来い」というようなことで行ったりね。考えてみますと。まあ、人数も少なかったですからね。そういう集まりっていうのは、それぞれの研究室で、ありましたね。そういうことで先生方との、和熟って言うんですかね、それが生まれてきたんじゃないかというような気がしますね。

2. 60年安保以後

古島——だいたい東大60年安保の頃大学で頑張った人が今、74、5歳ぐらいですけども、その後、次の70年安保から学生運動に至る、大学が一番大学らしくて元気よかった頃を山本先生や佐田富先生にちょっと回想していただきたいと思います。熊大の当時の状況っていうのは。



山本哲郎 (1967年入学)

山本——僕が入学したのが昭和42年の4月。44年の1月に教養部がストライキに入ったんですけども、当時は教養部体制というのが

非常にしっかりしていました。医学部の場合は特に、医学進学課程と医学専門課程っていうのははっきり分かれていたので、2年間は全部教養部で勉強するという形だったんですね。他の学部は、1年間は教養部で、それから後は半分ぐらいは専門と教養と、っていう風な形で教育を受けていたと思うんですけども。社会は高度経済成長期ももう十分進んでいた頃で、非常に豊かな社会になっていたと思います。教養部は非常に自由な雰囲気があって、それでクラブ活動も非常に盛んになっておりました。片方でですね、ベトナム戦争、それからベトナム戦争の流れでアメリカにはヒッピーというものが出てきて、我々が大学に入る前ぐらいのところで、中国の文化大革命っていうのが盛んに報じられて…日本の当時の大新聞っていうのはみんな文化大革命を称賛している風な時代だったし、それからラジオはもちろんのことなんだけれども、テレビも相当普及してきていたので、世界的なニュースっていうのがかなり早いテンポで学生たちに入ってくるっていう風な状況になっていたと思います。それで、我々は昭和23年、24年に生まれた、いわゆる「団塊の世代」だったんで、小学校・中学校の教育っていうのがですね、すごく民主的な教育を受けてきた。ホームルームをやって、子ども会をやってっていう風なことをやって、それで自分たちで政治的な考え方のトレーニングを受けてくるっていうような、そういう世代ですね。その過程で社会に関する正義感っていうようなものが叩き込まれるっていう風なことがあって。したがって学生っていうのは、非常に青臭いんだけど、社会正義感に燃えていたっていう。先ほどの東大紛争っていうやつが、1969年の1月の頭の方で、安田講堂が学生に占拠されるっていうことが起こったんだけど、実はそのおかげで日本全国の大学

に飛び火するっていう風なことが起きてですね。それで、70年…まあ69年の1月からたぶん半年ぐらいが一番全国的に紛争が広がった時期だったろうという風に思います。それから半年ぐらいの間が、熊本大学が非常に大きな争いの中にあっただけという時代だったと思います。で、その中身をです、詳しく喋るっていうのは、まあ、我々が死んだ後ぐらいがいいと思うんですけどね。先ほど古島先生から話がちらっと出たようにですね、その前の世代…60年安保の世代は特にそうなんだけれども、知識人と大衆っていう区別っていうのが、非常に意識が強く持っていた人たちで。大学を出たエリートっていうのは、知識人として大衆をリードしていかなくちゃいかん、指導していかなくちゃいかんっていう風な考え方っていうのが非常に強く持っていた人たちの世代だったと思います。それに対して我々の「団塊の世代」っていうのはですね、大学に入ってそれなりにエリートなんだけれども「自分たちは大衆でありたい」って風に、大衆志向の強い世代だったように思うんですね。だから何というか、そういう知識人としての言論活動で戦い合うっていうようなものよりは、大衆的に運動デモや大衆団交をすとか…そういう自分を「大衆化」していくっていう風な方向性を強く持っていたような気がします。大学自身が大衆化していった、同一世代が入ってくるっていうような状況だったんで、「大学の「大衆化」と「学生の大衆志向」っていうものが、一緒になった形で全国の大学紛争がまあ進展したんだろうと思うんです。ただこれは世界的な潮流もあって、ちょうどフランスでも、パリ大学でカルチュ・ラタンが起こっていて。先進諸国では、大学生がいろいろ社会に対して、批判して反抗するっていうのが起こっていた。我々の世代の紛争が抑え込まれてから、もう本当に学生た



熊大紛争 (1970年)

ちは大人しくなってしまった。
古島——今、「大衆化」って言いましたけど、当時、私の記憶だと、「大衆」っていうのは労働者階級のことを言ったように思います。一般大衆に迎合してはいけないというのを一方で学生の人たちは言っておられたんで、恐らくこの「大衆化」っていうのは、今で言う「民衆」とはちょっと違いますよね。学生運動が衰退したのは、今山本先生がおっしゃったように、連合赤軍とかああいう事件の後、1970年前後に、いわゆる知識人がさーっと引いていって、誰も支持しなくなってから。私が入った頃、何人かはまだ残ってましたけれども、それでもそういう人たちが1年1年いなくなって、74年か75年にはほとんど熊大からいなくなった。教養に入った当時、「クラトー」とか言ってよくやってましたけど、そういうクラトーもほとんど学生が支持しなくなっていたっていうのが、浅間山荘事件に始まるあそこのところ。たぶんあの辺から、大学も、教養の先生たちも随分変わられて、今で言う本当の先生らしくなされた。それまでは結構学生といろいろやってた気があるように思うんです。だから70年前後っていうのがやはり、大きな大学の節目で。それから国や大学も締め付けられていますか、ずっとこうやって今に流れているっていうのが流れかと思えますけれども。
福本——今日のお話は特にストライキを宣

言された山本先生ですとか、元気のいい古島先生ですとか、学生の元気のいい部分の話をついたような気がしますが、みんなそうだったのかな？という風にも思うんです。学生全員がそういう運動をしていたわけではないんじゃないかと。そうすると、ほかの学生はどういう風な学生さんだったのかと。

山本——熊大紛争が始まった頃っていうのは、寮の問題はあったんですけど、直接の問題になったのは生活協同組合の水道光熱費・什器備品代っていうのを大学に負担してくれていう風な世知辛い話のやつで、それをしないと、65円だった昼飯が70円に上がるっていう。最初のスタートは非常に少数の学生がやってたんだけど、やっぱり安田講堂事件のあれがですね、非常に学生の団結意識っていうのに火をつけるっていうような役割をしたと僕は思います。ストライキを宣言した後はですね、参加しない方が非常に少なかったと思いますね。あとは、7月、8月ぐらいにばらばらになって、で、講義がいろんな学部でばらばらに始まっていくって風になっていった。最終的には結局まとまりのつかない形で全部終わってしまったんです。そのとき、途中までは、ストライキを支持している学生が大半で、あるところぐらから逆転現象が起こってって、ま、後ではやっているのが非常に少数っていう風になったんだけど「俺には関係ないや」っていう風な感じでしたのはほとんどいなかったと思いますね。

古島——佐田富先生は、その頃は？

佐田富——僕は、一番ひどい時を知らないですね。というのは、入学する1年前がちょうどピークの年で。1年前のときは、東京大学の入学試験がなかった年ですね、安田講堂の事件で。それで僕が入ったときには、まだ熊本大学は学生運動が少し残っ

てはおったんですけどね、もうピークは過ぎていました。1年前の人たちの話を聞くと、「入学してしばらく遊んどけ」ということであつたと。確か半年ぐらい自宅待機になつたと、そういう風に聞



佐田富道雄 (1970年入学)

いています。その割にはちゃんと卒業できているのが不思議だなと思います。僕らが入ったときはまだ学生運動が残っておりまして、授業時間の始まりのときに、活動家の人たちが来て、「オルグ」っていうんですか？そういう活動されたりとか、それから「自分たちの仲間に入って活動しないか？」とか、そういうことはありましたね。それから、たまにですけど、デモがあつてまして、私もわけわからんでデモに参加したこともあります。そんなに政治的に強い意志を持っているわけではないんですけどね、なんとなく、そういうのに参加するのが大学生かなという、そのくらいの感じで参加していた。ただ、だいぶ先生方の考え方が、僕らが入ってきた頃には変わつてきたような気がしますね。特に若い先生方は、やっぱり「昔の先生と同じじゃないか」という風な考え方をお持ちだったみたいです。それで我々が入ったときは…工学部っていうのは一色じゃないですから、学科でいろいろ違うので、僕らが入ったときは機械は前の年ともうカリキュラムを全部変えられました。ですから、「先輩に聞くな」というようなことを言われて、新しい教育カリキュラムでだいぶ勉強させられました。

古島——当時は先生も学生をある程度大人として扱つてくれて、そこが高校と大学の違いかなっていうのがありましたよね。

佐田富——そうです。今はものすごく子どもになりましたのでね。

古島——やっぱりある程度先生に対しては尊敬の念はあって、授業なんかでも今は、ああだこうだ文句を言ってくるんですけども、当時はある程度自分の問題としてやってたので、よっぽどひどい場合は別にして、一般的に講義や授業に対するクレームっていうのはなかった。私が72年に入ったときも、もうそんな状況で。まあもう山本先生たちの世代もすっかり足を洗われて、大学も民主的になって、ちょうど新しい——例えば、フォークソングが流行ったりとか、新しい文化がキャンパスに入りだした、ちょうどその頃で。いわゆる「四畳半フォーク」みたいな。学生さんはどっちかといったらああいう「四畳半の世界」に行くと、熱い人は余りいなくなって。今でいう男女交際も含めて、周りにもそういうのは結構たくさんいた。山本先生の頃もいたんでしょうけど、余り目立たなかったですよ。それがキャンパス内でも目立つようになったっていうのは、恐らく大学が平和になったっていうことかなっていう気も…。やっぱり私はね、大学の授業は高校の授業とは違うなっていうのは、非常にそれは感じましたね。新鮮味があったような気がしております。

佐田富——あれは単位がね。学部によって違うと思うんですけど、我々のところは1年のときの数学1科目落としたり留年。そういうのが今と全然違うんじゃないですかね。それから語学も2つ落とすと確か留年だった。

古島——確か134単位…今より10単位ぐらい卒業要件が多くて、昔は一般教育と教養教育で両方単位を揃えておかないといけなかった。大綱化前はみんなそうでしたけれども。それが124までどんどん落としてきて、今の方が学生さんはだいぶ楽になって。

3. 共通一次世代——1980年代

古島——どんどん世代が若くなってきました。深町先生どうですか？

深町——私の頃になると、「遅れてきた世代」なんでしょうね…「シラケ世代」というような世代なんだと思うんですけど。私82年卒になってますけど、実際は2年留年してますので、ちょっと前っていう感じなんです。まだ生協裁判が結審していませんでしたので、熊大は最後に残った紛争校だとか言われてました。それで、生協で頑張ってる友達なんかもいまして、オルグにもときどきはいろんなセクトの人が来てました。みんなまあそれなりに耳は貸すんですけど、あんまりちゃんとは聞いてない。ちょっと言ってることが乖離しているっていう感じがありましたね、生活観と。ただ生協裁判があったおかげで、当時生協は「日本で一番美味しい食堂だ」って言われて本当に美味しいっていう実感がありました。当時は生協でみんなよく食事をしていました。そして、生協の食事が下宿の食事とそんなに引けを取らないぐらい、値段的にもリーズナブルだったような。それも恐らく闘争中だったんで、頑張ってる組合員に味方してもらおうという気持ちが強かったんじゃないかなと思います。そういう具合ですので、例えば、私たちの頃は水俣病の問題がまだやっぱりピークにあった頃ですので、自主講座とかそういったことを学生で勉強したりというようなことはやっています。私は



深町公信 (1976年入学)

あんまり関わりはなかったんですけど、よくそういう自主ゼミみたいなものには行ってきました。ただ、それがじゃあすごく切実な気持ちで行ってたかという、もう既に、そういうことをやるのがファッションになっていったという感じがありました。一方で私はレコード集めたりするのが好きでしたので、よくみんなと夜通しレコードを聴いて、そして好きな曲をカセットテープに入れて渡したりっていう、今の若い人がやっているもののはしりのようなことをやっていた。まだまだ今みたいに豊かっていうほどじゃなかったんですけど、相当生活を切りつめないとやっていけないっていう時期じゃないので、そういうのが恐らく、学生運動なんかの理解にもだいぶ違いが出てきているのかなって、今、先輩方のお話聞いてまして思いました。

古島——山本先生の頃はアルバイトっていうのはどういうのを？

山本——医学部の場合は家庭教師が非常に多かったんですけども、子どもたちの学生塾で教えているっていう風なこともやっていました。今みたいにレストランとかでアルバイトするっていうのはほとんどなかったような気がしますね。

古島——私が思うのは、夜、いわゆる飲み屋とかでアルバイトしている女子学生が余りいなかったんです。最近、結構女子学生に聞くとそういうのが多いので。当時は女子学生は家庭教師とか、レジやったりとか、そういう仕事をしていたように思いますね。今は夜遅くに女子学生が帰るみたいな状況で…まあもともと、この辺は物騒なところでしたから余り下宿している学生もそうなくて。だから女子学生が増えていって、男子学生以上に、女子学生の生活っていうのが随分変わったんじゃないかなっていう気はしているんです。その辺宮瀬先生の方から感じられることがありますか？

宮瀬——私は卒業が1981年なんですけど、もちろん大学紛争は完全に終わっている。で、共通一次の直前ぐらいの世代でした。まだ、男女雇用機会均等法なんかありませんので、4年大を卒業した女子っていうのは田舎では就職がない。教育学部はまだ就職状況が良かったですから、みんな教員になる。若しくは公務員、というところだったんですね。一般企業では、例えば生命保険会社なんであつたら、短大卒は採るけれど、4年卒は採らないよっていう時代でした。ただもう、いわゆる詰め込み教育というんでしょうか、系統的な学習っていうのが重視されだした世代ですので、受験勉強っていうのは、それなりに厳しくなってきた時代だとは思いますが。大学に入って逆に、受験勉強とは違う、社会に対する関心の度合いみたいなものを試されるような授業内容が多くって、例えば、ベトナム戦争と日本の関わりであるとか、アメリカの黒人差別の問題についてどう考えるかみたいなことを、英語の先生に問われて。受験勉強だけやってきた世代なので、なかなかそういうことを知らずに大学に入ってきて、そういうことを学ぶのが大変新鮮な気持ちでした。大学内には立て看みたいのがあったんですけど、なんかもう自分たちには関係のないっていうような感じの人の方が大多数だったと思います。授業の前に10分間ぐらい、自治会活動だったと思うんですけども、ちょっと時間が欲しいということで来られて、なんかこう話をされたり。クラスから2名ずつ、一応、自治会の係みたいなのを出してくれて言われたんですけど、実際どういうことを



宮瀬美津子 (1977年入学)

やってるのかってというのは無関心のままで。ちょうどですね、あの大学の変換期っていうんでしょうか、大学の授業料も私立並みに上げていくんだってというような時代に差しかかってましたので、私の授業料は1ヵ月8,000円で、年間で9万6,000円だったんですかね。自分が8,000円だったときに4年生の先輩が3,000円ぐらいだったんですね。で、1浪して入った同級生は授業料が年間10万円を超していました。私は大学を出てすぐ、小学校の教員になったんですけど、そのときの初任給が…基本給がですね、10万4,000円だったと思うんです。で、今教員になって、学生に新採用の先生の基本給はいくらっていう話をするんですね。大体20万ぐらいなんです。そうすると、教員の初任給がおおよその間に2倍になったんだけど、大学の授業料は5倍、6倍と上がっている。そういうことを話すと、学生もすごく「うーん…」って。もう、お金が無いと大学に…っていう。特に最近では経済的理由で4年生で退学をしてしまう人もいて、高等教育への支援のあり方みたいなものを考えさせられずにはいられないですね。それから、昔は教育学部を出て、すぐ教員になると、奨学金を返さなくていいというのもありました。だから、非常に奨学金をもらっていた。今はもうそういうのもなくなって。昔は非常に充実していたように思います。当時教育学部では、小・中・高、そして幼稚園免許まで取ってっていうようなですね、取れるものは何でも取ろうという時代だったので、卒業までに182単位ほど取りました。しかも、まだ100分授業で、4コマだったんですね。土曜日も授業があってまして、それでも足りずに土曜の午後も1コマ授業を受けていました。私は家庭科だったんですけど、実験実習が結構ありましたので、例えば衣服実習っていうと、2コマ分ゆうに使ってそ

れでも終わらない、っていう形でしたので、3年生とか空き時間がないぐらい。もう少し、社会的なことも関心を持って、ボランティアとかいったような余裕はちょっとなかったかなあ、というように思います。毎日きっちり朝から夕方まで学校にいて、勉強していたような気がします。今、私の学科のスタッフは6名なんですけれども、私が学生の頃は先生が9名おられました。3分の2になっているんですね。で、学生数はほとんど変わらないんです。定員削減だとかそういう問題の中で、専門の先生が減ってきていて、逆に教員の立場になってくると、学生の興味関心に応えるだけの環境を用意できているのかなというところで、ちょっと申し訳ないような気もしています。そういう中でもサークル活動などは、結構熱心だった。私は1年間だけマンドリン部に入ってたんで、そのとき新聞社の方が取材に来られたんですね。ちょうどマンドリン部が創立20周年だということで、生協の2階で練習している風景を。その横にはですね、立て看がありまして、時代を表しているかなあ、と。一方ではですね、楽しいのもいろいろありまして、ダンスパーティー、先輩たちは合コンとかですね、そういうのがありました。大学の近辺にマージャンの雀荘っていうんですか？ ああいうのがありまして、男子学生はそういうところに徹夜でマージャンをしたりっていうのもあっていたようです。パチンコはそれほどでもなかったのかな、よくわからないんですけども…。

古島——子飼にパチンコあったですね。

宮瀬——アルバイトは家庭教師がほとんどだったんですけども、今の保健センターの1階に学生課みたいなのがありまして、アルバイト情報がずらーっと貼ってありました。当時ですね、夏休みの男子学生向けだと思うんですけど、肉体労働で効率よく



掲示板でアルバイトを探す学生

稼げるよっていう、イ草を夏に刈るといようなバイトなんかもありました。

古島——確かにあった。

宮瀬——それから、当時は単位取得確認のために教養部に成績がずらっと貼り出してありましてですね、科目と氏名と優良可みたいなのが貼ってあって、なんか個人情報どころの騒ぎじゃないみたいですね。割とオープンな感じですね。それから、就職活動っていうのについていうと、教育学部はもうほとんど教員になるということで、教員採用試験に向けて勉強していたんですけれども、ちょうど私の学年のときから、九州は採用試験の試験日が一緒になりましたので、1つ上の先輩までは大体2県ぐらい受けておられた。ほとんど全員合格してました。私たちの時代も各県いろいろあったんですけど、私の同級生は全員教員になりました。今の学生はちょっと気の毒なんですよ、採用数が少ないというところで。まあトピックスということでは、大学の中で、特に学部の中でいろんな行事がありまして、体育祭なんかは盛大にやってみて、前夜祭からやって本番をというぐらいいに。まあ忙しい中にも、そういうような活動に対しては、取り組んでいたような気がします。教育学部は女子学生が多かったんですけど、道向こうの工学部あたりには女子学生が少なかったですから、前夜祭のときには工学部の学生さんが一升瓶片手

に冷やかに来てましてですね、そういう楽しい思い出もありました。

古島——運動会とか、一時期やってましたよね、教育学部は。

宮瀬——今でもやってるんですけど、参加がすごく少なくてですね。

古島——前は武夫原で結構派手にやってたような。

宮瀬——はい。私たちの頃、1年生は昼休みの時間に仮装行列、2年生は前夜祭で出し物をやるっていうように決まってるですね。すごく盛んにやってました。

古島——どうですか、甲斐先生は？同世代ということで、ちょっとキャンパスは離れてますけど。

甲斐——宮瀬先生がまじめに大学行ってるときに、ほかで遊んでたという対照的な学生だったんですけど。私はちょうど共通一次の第1期で、受験チャンスも1回だけという環境で。先ほど山本先生の話をお伺いしましたが、小学校5年生のときにテレビで大学紛争を見て、親とは「大学行くもんじゃないね」って、そういう話をしてたんですね。田舎なもんですから、身近に大学生がいない環境だったので「大学ってこういうところか」っていうのがあったんです。高校のとき、中村雅俊の『俺たちの旅』っていう番組があって、大学を謳歌するような良いのだったんですよ。我々共通一次のときっていうのは、ほんと受験戦争真っ盛りという時代で、「大学に入ったら絶対遊ぶぞ」とか「遊ぶために大学に行くんだ」というぐらいいの高校生が多かったかな。ちょうど我々1年生に入った時に、宮崎美子さんが……。



甲斐広文 (1979年入学)

宮瀬——同級生です。

甲斐——同級生ですね？我々の1つ下に斎藤慶子さんがいて、熊本もそれなりに全国的に注目を集めている時代だったかなと思います。あとはまあ、宮瀬先生が言われたように、子飼パチンコは…子飼パチンコって「ミカサパチンコ」だったかなって思うんですが、ちょうど1年生のときにまだ手打ちが残っていたんですね。我々のときから少し、手動から電動に変わり始めたような時代で。あとは雀荘から食堂から。大体400円で山盛りの焼肉定食がこの近辺で食べられた。それが唯一の贅沢で、お金がないときは生協に行って100円カレーを食べるという。大体そういうことが学生生活の中心だったかなという風に思います。あとはですね、講義は、当時は基本的に授業スタート30分遅らせてくれる先生とかですね、出席をとらない、あるいは出席とったとしても代返ばかりで。ただそれが逆にいろんなことを考えさせられて、自由で本当に良かったなあと。今の、ある意味の学生的なものとか対比すると、余りにギチギチになってしまっていて、受験勉強以降もギチギチの生活を送っている。それから社会に出ていく。人生のうちのどこで謳歌したんだという時がないままじゃないかな。我々はあの時間があったからこそ今があるというか、社会に出て頑張ろうかなという気になれるのかなという気がしています。あとですね、カラオケがちょうど流行り出した頃でした。それから黒髪祭が本当に楽しかったですね。今と違ってお酒を好きなように飲んで。確かに喧嘩とかもありましたけど、それもそれで若い頃の楽しみの1つで。

古島——いつ頃まで酒飲んでよかったんですかね？先生の頃はまだよかったんですか？

佐田富——江口先生が学長のときからで

す。あそこで変わりました。

古島——じゃあもう、随分最近まで飲んでたわけですね。薬学部は女子学生っていうのは、昔から今までずっと多いでしょう？

甲斐——そうですね、我々、共通一次前はですね、女子学生が8割、男子が2割ぐらいですかね。共通一次のときになぜか、男子が4割ぐらいから5割近くなった。我々の世代からしばらくは男が結構多くてですね。マージャン、パチンコ、飲み会から何から、すごくアクティブにやっていた時代。それから7、8年するとまた女子学生がどっと増えた。世界の景気に応じて、なんとなく変動しているんじゃないかな、という気がしますね。当時はやはり、女性はほとんど薬剤師になるために薬学部に入っている。で、男性は逆に「薬剤師にはならん」と。だから研究とか社会、会社とか、はっきり分かれていたんですね。だからなんとなく社会の流れに応じて、不景気だから今はまたちょっと薬剤師希望者が増えたりとかはありますね。就職は、我々のときは面接受ければOK。あとは教授の推薦ですべて決まると。だから教授が会社名をばあーっと出して「好きなところを選べ」と。そこ行って面接を受ければ終わりという。我々の後、10年後はバブル真っ盛りで、もうどこでも行ける。それがバブルが弾けた後はどこにも行けない。ほんとにもう社会の動向…就職先にも影響して…。ある意味で、学生はかわいそうなんですけどね。大学院まで行って本当に研究所に行きたいと思っているのに、社会の流れでそれを諦めた、ダウンしたっていう学生もたくさんいました。

古島——自治会みたいなのは薬学部はあるんですか？

甲斐——あります。我々が大学院生ぐらいのときには、「剛毅会」っていうのができたんですけれども、男だけの会で、ふんどし

穿いて、上通り下通り走って、酒飲んで、清正公まつりで神輿を担いで。やっぱり男も元気になろうというような。女性がどうしても多いからですね、そういう活動は結構あってましたね。

古島——工学部はどうか、女子学生の変遷は。どんどん増えてるでしょう。

佐田富——学科によってもものすごく違いますね。僕の所属している機械が一番少ないところですよ。油污れるようなイメージを持つんじゃないかと思うんですけど、ベースは物理数学です。

古島——例えば入ってくる女子学生のモチベーションは、昔と今での変化っていうのは。

佐田富——女子学生は非常にモチベーションがあって入ってきている。最近男子学生が非常にモチベーションがないです。昔ははっきりしていた。高度成長期、日本の科学技術っていうのはいろんな面で「これは世界一になりました」とかそんな時代ですからね。だから私が機械を選んだのもそういう意味なんです。世界をリードするような科学技術者になろうと。もう大学に入る前から決めていました。だから、そういう意味では昔の学生の方が非常にはっきりしとったと思うんですね。それから、大学の間はなにしろ自由ですから、「何でもやっておこう」というところはあったような気がしますね。「社会に出たらちゃんとまじめに仕事しよう」ということで。運動会でも、工学部の運動会は、最近はどうだめですけど、当時は先生もみんな、前の晩から来られて、一緒に酒飲みながら。本当に楽しかったです。

古島——そのバンカラ的なイメージが残っていたのは、70年代、その辺までですかね。80年代の半ばぐらいだともうそういう雰囲気じゃないでしょ？70年代はまだ社会が、バンカラ的なイメージを熊大に持って



工学部の運動会（1980年）

いた時代があって、それがどんどん細くなって。

佐田富——やっぱりものすごく落差をものすごく感じましたね。

古島——甲斐先生の頃、バンカラは。

甲斐——ありましたね。工学部の運動会が楽しいと。

古島——やっぱり工学部が代表してましたからね。その工学部がだんだん上品になったっていいですか。

佐田富——運動会は1回中断しました。10年間ストップしたんですね。

古島——何か理由があったんですか？

佐田富——引き継いでくれる人がいなくなった、それだけですけどね。

古島——学生同士の横のつながりっていうのが昔から比べると…。

佐田富——今はもうどんどん。今運動会に出ている人の比率は非常に少ない。だけど、出ている人たちはすごく楽しんでいるような気はしますね。今は酒飲めないですけど。

4. 教養部解体前の学生生活

古島——最後に90年代。教養解体の動きがあって、教養部の先生が浮足立ったのがこの頃ですね。設置基準の大綱化が1991年です。それで、それから2、3年して各大学で解

体が始まって。熊大は1997年に教養解体しました。1997年だから随分遅いですよ。大坪——先生方が今おっしゃられた学生運動とかは、もう先輩から「俺たちの時代はな」って風に聞く話だったんですよ。私は考古学なんですけれども、日本各地いろんな所に、発掘がよその大学でやってるよという、その現場に行くんですけども、たまたま赤いヘルメットを持って行っちゃって「お前はどっちなんだ」と言われたとか、そういう話を昔話のように聞いた世代ですね。ただ大学に入って、名残といえば、今の北地区の生協の所のトイレに「金大中氏を殺すな」っていう貼紙が貼ってあって、それを見てものすごく「怖い」っていうイメージを抱いたぐらいで、今日お聞きした話っていうのは本当にひと昔というか。下宿とかアパートは、私たちが選ぶときには、ユニットかユニットじゃないかとか、そういう基準でした。私は合格発表があって1週間後に熊本に下宿探しに来たら、きれいなそういうユニットバスがありますよとかいう所がもうなくて、おばさんが居て間借りをさせてくれるような所の1室を借りたような感じでした。

甲斐——銭湯は、まだ？

大坪——銭湯はもう入ってないですね。同級生では行ってる子もいました。黒髪の八幡湯っていうのが残ってましたし、たぶん6丁目…5丁目かな、にも銭湯があったので、男の子なんかはよく入ってました。

佐田富——今はもうないですよ。

大坪——私が入った頃はバストイレが共用のアパートに住んでいる子はそこに入りに行く感じでした。あと、私も子飼商店街でお買い物をして、自炊をしていましたけど、やっぱり生協が安く食べられるので、生協にもよく足を運びました。私のときには、私はもちろんしないんですけど、男の子はマージャンよりはパチンコをしていた

ような気がします。それと、私の先輩までは卒業論文を原稿用紙…400字詰め¹の原稿用紙に手書きっていう方が1人残っていたぐらいで、ようやく学生身分でも、1人1台ワープロを使って書いていました。私が修士を出る頃には、windows98を贅沢な学生は持っているかっていう世代だったなあと思います。携帯電話も、流行もの好きっていう子が学年で1人持ってるか持っていないかぐらいでした。当時は学生証が今みたいにプラスチックのカードではなくて、まだ紙の学生証でした。成績証明書は学務に行行って、お願いしてもらおうとかだったなあというのと、履修届が、今、学生さんはパソコンで入力をするんでしょうか？当時は履修届っていうカードを教務でもらって、それに自分が取りたい科目と時間数とを書いて、ひと束にして出すっていうことをしていたな。あと、先ほどアルバイトの話がありました²が、アルバイトの情報が保健センター²に貼り出してあって、大体家庭教師が多かったんですよ。男子にも女子にも。だけど、私の先輩とか同期でいくと、パーティーコンパニオンっていうバイトがありました。

古島——ありましたね。

大坪——それから、私が入学した頃は、夏休みは7・8月で前期だったんですよ。今は8・9月になってるんですけど、7・8月で前期の試験が9月。なので藤崎宮例大祭の練習の騒音の中で前期の勉強をしていたのを思い出しました。ちょっと今ばって思い出すのは、大学祭は私が入学したときもまだ黒髪祭³で、もうとにかく北地区の生協の前のあのきれいな芝生の所のいっぱいまでテントが立ち並んで、お酒ももちろんもう無礼講で、本当に夜通し飲んでたっていうのを覚えてます。やっぱり、それがやっぱり大学に入って「ああ、大人だな」っていうのを実感した瞬間でし

たね。

古島——どうですか？一言、今まで聞いて。

福本——私は、世代は今の大坪先生から遡っちゃうんですけど、甲斐先生と一緒に、共通一次最初の年です。さっき話に出ましたが、やっぱり受験戦争の時代、大学入ったところである程度目標達成みたいな。大学での勉強という意味では、正直法学部っていうのは大教室で勉強するところですので出席も採りませんし、試験も前期1回、後期1回というような感じで受けるだけです。学生生活の中で、学校に来る目的っていうのは、僕の場合、サークルがほとんど。大学では探検部に入ったんですけども、探検部は、土日になると山に行ったり、洞窟探検…ケービングに行ったりというようなことを月に2、3回やるというサークルでした。サークルで思い出すのが、サークルボックスが、僕が1年の冬休みのときに火事になって燃えたんです。火元が実は探検部で、誰もいないときだったんですけど、ちょうど冬の合宿の朝に来たら、燃えてなくなっちゃっていた。山本先生たちは学生運動されていたというのですが、私たちも実はサークルボックスが燃えた後に、代替施設を建てて欲しいということで、大学にいろいろ申し出をしました。たぶん私たちが最後じゃないかなと思うんですが、デモ行進を實際やりました。新しくサークルボックスは、その後



福本哲也 (1979年入学)

プールの南側に建ちました。それから探検部という性質上、夏休みには長期の合宿に行くんですけども、その長期の合宿に行く



黒髪祭のステージ

ために、そこそこまとまったお金も必要になってくるので、長期のバイトをやるんです。熊本には全国の松喰い虫を駆除に行くようなバイトがあったんですね。私はそのバイトをしまして、当時は1日大体8,000円から1万円ぐらいのバイト料がもらえました。これは熊本市でするのではなくて、例えば東北ですとか、九州でも佐賀だとか長崎だとか、そういった所の松林がある所に松喰い虫駆除に行くんです。ただ、一般的にはやっぱり家庭教師が多かったです。学部でいうと、法学部っていうのは250人ぐらいいるんですが、女性が大体10分の1ぐらいでしょうか。僕らの頃ぐらいまで、男性がほとんどの学部でした。女性はほとんど家庭教師をしていましたし、就職も女性は公務員という道が多かったと思います。男性も公務員が多かったんですが、ちょうどバブルのはしりの頃です。就職については、文系理系関係なしに情報系の会社、コンピュータ関係の会社っていうところが就職先としては出てきてました。民間では金融関係の会社、銀行ですとか生命保険とか、そういったところに就職する人たちが多かったですね。大学祭については…黒髪祭にサークルでテントを出して。前の日は準備を、当日は自分たちが学年が下のときには店番・テント番をやりましたが、だんだん学年が上になると、当時、黒髪祭はロック・インとか

ジャズ・インとか、そういうので学外の人たちも来られてましたので、そういう人たちと、朝まで、騒いでいたのを思い出します。

古島——就職状況っていうのは随分やっばり変わったんですか？

福本——良かったです。まあ選ばなければっていうのはあったと思いますし、中央の企業でも、例えば、丸紅だとか日商岩井だとかそういった商社にも入ってます。先生たちからの紹介というよりも、結構当時は先輩が毎年リクルートに来てまして、先輩から「お前来たか」みたいなそんな感じの声掛けから始まって試験を受けてみて…というような感じの就職活動が多かったですね。

古島——面接に行ったら、会社から旅費が出てたでしょ？今は全然出てなくて、自腹で行かなきゃいけないんですよ。

福本——そうなんですよね。

佐田富——両方ある。

古島——両方あるんですか？工学部あたりはどこか会社から？

佐田富——会社の方から推薦依頼っていうのが来て、推薦依頼で行く場合は旅費が出ます。

古島——就職って工学部の場合は大体推薦で行くんですか？

佐田富——学科によって違うと思うんですけど、うちの学科は推薦の方が多いです。

福本——もうOBの方は来られるっていうのはないんですか？

佐田富——OBは来ます。でもOBが決めるっていうのじゃなくて、現役の学生が親しみを覚えてくれるよう、会社のPRに来てますね。

古島——先生が学生の頃から大体そういう感じですか？

佐田富——いや、僕の学生の頃はOBなんか来なくても、よりどりみどりとというか、

選んだら必ず通るという時代でしたね。

5. 教養解体前までを総括して

古島——まあひと通り話していただいたんですが、出口先生・松本先生たちがおられた頃と比べてどうでしょう。

松本——変わってますね。

古島——どんな感じに思われます？

松本——初期の頃は、コンパなんてものは全然ないわけですね。世の中全体があんなんだし。私はその後20年経って大学に帰ってきたんですけど、その頃は研究室でコンパやるでしょ。ああいうのが全然なかったんで、ちょっとびっくりしました。

古島——もう学生の質が変わったと。まあ僕らの世代も質が変わった世代だと思うんですけども、大体どの辺がターニングポイントだと思われますか？

松本——どの辺でしょうかね？先生も変わりましたよ。五高の先生っていうのは、教えてくれるのですよね。読む本だけ教えてくれる。だから、昔は講義があると、とにかく全部ノートをするわけですね。本の名前が出たらもう幸せな方で、これを読めばいい、と。私が教員の頃はちゃんと「何ページ」ということを言い、大学を退職する頃には、もうそこところをコピーしてやらんといかんでした。そのくらい変わりました。昔の先生たちはあんまり教えてもくれんわけですよ、どういう風にしなさいってというようなことを。それから、戦後だから本がないんですよ、また。卒論書く時なんかは、しょうがないので九大まで行って、1週間ぐらい泊まってました。そして当然コピーもないですからね、写してこなくちゃならん。そういうような勉強でしたね。結局、退職する頃になって「あの先生が言ったのはこういうことか」とわか

るようになった。ですから、昔はかなり不親切ではあったし、勉強は本当にしないと大学の講義には追いつけなかったですね。甲斐——当時は出席はとったりしとったんですか？

松本——いや、もうそれは全然勝手。8人ぐらいですからね、すぐバレもするし。それから結局欠席をする方が悪いわけで、話を聞き逃すわけですからね。当時は参考にする本もそんなになかったですよ。

出口——我々もですね、化学科は10名でしたからね、それで出席なんかほとんどとらないんですよ。そうして講義の内容などがリ版を作って、配ってもらっていたような記憶がありますね。当時はとにかく本がなくてね。だから古本屋にしょっちゅう行っていましたもんね。

松本——なかったですね、本当。

6. 教養解体後から現在の学生像を見る

古島——特に教養部の解体後っていうのは、大学が大きく変わった。教養部の果たした大きな役割の大きな1つは、高校生から大学生になるという、ある意味では大人になる時期の教養を担っていた点だと思います。教養部っていうのが果たした役割っていうのも結構大きかったように思えるんです。我々は教養部を経由してきた世代ですので、その辺も含めて、今の学生さんを見て、昔と比べていかがでしょうか。

佐田富——以前は教養部門の中にすごく熱心な先生がおられた気がするんですね。だから単位の出し方でも厳しい先生がおったりとか。そういう先生がおられた頃は良かったと思いますね。今、僕も教養の授業を受け持ってやっとなんですけどね、単位が合か否しかないんですが、いろんなことをさせると明らかに差があるんですよ。2

年生の頭から本格的な専門教育をやりますよね。私、2年の最初の必修科目も受け持ってるんですけど「ちゃんと勉強しないと単位取れないよ」っていうのに、それを他人事みたいに聞いている。それで単位を取れない学生の比率がどんどん上がりましたね、昨年、2年生でちゃんと単位取れたのが40%。なめているわけです。その連中は1年間すると単位取れるようになるんですね。「大学らしさ」なんて言うんですかね、さっきいろいろ話が出てきましたけど、大学生と高校生との違いの、その違いが、学問的とかそういう色合いじゃなくて、違う方に行ってるような気がしますね。

古島——やっぱ学生っていうのは、ひとつの時代の鏡でもあるし。

佐田富——先生も鏡だと思います。

古島——教養の今の「基礎セミナー」は他学部の学生さんも入ってきますよね。

佐田富——「自分で調べたこと発表しなさい」っていう部分があるわけですけどね、同じことしか言わないですね。これはたぶん試験制度の関係があるんじゃないかなと。義務教育からそうですよね。みんな同じことをさせるんですよ、日本の教育は。だからそこを変えないと変わらない。大学だけ頑張ってもしょうがないんじゃないかなと最近思います。

古島——私も薬学部で授業していて何人か落としましたが、昔は文句言ってきたんですよ、「往生際が悪い」っていうか。ところが最近ね、「往生際がいい」学生さんが増えて。そこが随分変わったんですね。甲斐——まあ、確かに今の教育の均質化とかいろいろあってですね。熊大といえどもない、面白い学生がいるというのが、社会からの評価も昔はあったんですが、大体今はどこの大学も似たり寄つたりの学生ばかりになってるっていうことが言われてはいますね。なんとなく最近思う

のは、1年生のときの教育。1年生のときの、初っ端の教育を誰がするか、どの先生がやるかっていうのがすごく重要で。やはり熊大、大学全体のエース級を1年生のときに持ってくる。そこでいかにモチベーションを上げさせるかとか、あるいはその、「高校と大学違うんだよ」っていうようなことも含めたことをいかにやるかというのが、一番大切かなと思うんですよね。評価がどうであろうと、「これやっとかんと、世の中に出たら困るでしょ。だからこういったところを勉強しとかないかんよ」って。1年生のときにいかにやるべきかっていうことが大切かなあという。最近特にそれ思うんですよね。

古島——学生が内向きになったとかとよくいわれてますよね。

甲斐——我々にも責任はあるんじゃないかな。高校までの授業の受け方をそのまま大学でも継続するんですよ。だからなんとなく、まじめな均質な学生が増えてるんです。昔に比べて。恐らく、授業さぼらない学生が増えてるんですよ。でも、本来は結果的に理解しとけばいい話なんですよね。

山本——自分で学ぶっていうことをどうやって身につけてもらうかっていうところが最終的には一番重要な、その教育の目標なんだろうと思う。なぜかという、医学の場合に、最近の生物学的な医学の研究の速度が非常に速くてですね。学生が1年間で理解して覚える量よりも、1年間で研究者が作り出している新しい知識の方が多い。そんな風に思えるので、絶対学生が追い付いていくっていうことはできない構造になってるんですよね。1年間勉強しても、それよりも大きいもったくさん新しいことが生み出されておれば、構造的に絶対追い付いていかないわけですよね。だからそんな風な状況で、知識偏重の教育をやっとしてもこれは絶対ダメ、もうそうい

う時代になってしまっているって思うんですよね。そういった中で、どういう風に、学生に何を求めるのか、何を身につけさせていくのかっていうところを、もういっぺん考え直さないかん時期に我々も追い込まれてるんだらうなっていう風に思いますよね。少なくとも今みたいに、パワーポイント1つの中に、まあ20も30も式だけ詰め込んで、それをパッパ、パッパ、パッパ、パッパ、2分ごとに流していくようなのは、丸反対のやり方なんだろうと思うんですけどね。

古島——昔の学生っていうのはどこを見てたのか、今の学生はどこを見てるのかっていう、その見てる方向についてはどう思われますか。

山本——やっぱり自分の大学の4年間なり6年間なりっていうのは自分の人生なんです。私は学生運動もやりましたし、恋愛もやったし、結婚もしたし、ヨーロッパに3ヵ月ぐらい遊びに行ったし、クラブ活動も精一杯やっただし、もう大変忙しかっただっていう風に今の学生に言うと、もうびっくり仰天驚くんですよ。今の学生は誰のために、何のために、生きとんのか、生活しとんのかっていう風なところが、なんかちょっとあやふやになっような感じがしますね。それはまあ時代的なものが一番大きいんだらうとは思いますがね。

深町——学生の体質としては、今も昔も単位が欲しいっていうのは変わりがないと思うんですよね。ただ、その単位が欲しいっていう中身がだいぶ違ってきてるなっていう感じがありまして。我々の頃だったら、単位も「可なりりません」っていう答案も結構みんな出して。「ちゃんとやったからこの単位が取れるんだ」と。まあ法学部は、大人数の教室である講義がほとんどですから、ほとんど教科書読みっぱなしっていう先生もいらっしやいました。そこで

我々は「この先生が言いたいことは何なんだろう」っていうのを逆に感じ取らなきゃいけないかったですし、それをやっぱり友達同士で話したりもしていて、そこから理解ができていったような気がするんです。今はもう、高校までの教育までで、プリントを配って、そのプリントに書いてあることだけをやればいいんだっていう刷り込みみたいなものがあるって、こっちもそういうのを出さないといけないっていう強迫観念みたいなものもあります。あとやっぱり、シラバスが悪いんですよね。シラバスで何でも書いて、そのとおりにやらないといけないっていうことで、逆に、授業のビビットさを削いでるような。法学部の場合は「基礎ゼミ」っていうのをやっていて、ノートのとり方からレジュメの書き方までみんな教えてあげるんですね。我々の頃は教えなくても「自分のノートも自分のためにとるものだ」っていう発想でしたけど。そこをそもそも教えないといけないっていうのも、厳しい時代に入ってるなっていう風に思います。

宮瀬——私はちょうど教員として熊大に入ったのが、法人化された初年度で。卒業生として、大学の恩師と接していた頃には大学の先生っていうのはもう少し余裕があると思ってたんですけど、自分が教員になってみると、大学の先生ってこんなに忙しかったのかなと。今は、研究、教育、社会貢献といろいろなことが求められる中で、先生方も時間的に余裕がないような気がして。私が学生の頃は、先生によっては人生相談の時間もとってくださった。今は、手とり足とりっていうんでしょうか。新入生ガイダンスも昔は学生便覧かなんかポツと渡されて「単位ってどうやって取ったらいいのかわかるのか」って自分たちで一生懸命になってやって、ガイダンスなんて一切なかったような気がするんです。今は学生の

方も「手とり足とりやってもらって当たり前」、授業中も先生がちゃんと板書してくれるのが当たり前みたいで、何も言わないと、ペンも動かさないみたいな。あと、情報もすごく豊富なので、レポートっていうのもインターネットとかなんからコピーしてきて。で、それが本当なのかどうなのかって批判的に考えるって側面がなくて。こちらから見ると、ここは明らかになんか写してる、貼り付けてきたでしょ、みたいなとかありますね。

佐田富——読ませるとわかりますよね、間違ってるんだから。日本語の読み方が。

宮瀬——自分が書いたところは日本語がめちゃくちゃなんですよ。それから大学って、社会人を育てるための最後の仕上げの段階だと思うんですけど、そこが十分に身につかないまま送り出してしまっている。自分で考えて自分で社会体験をしながら、そこから学びとっていく力っていうところをどうしていったらいいのかな、あんまり懇切丁寧な指導に走りすぎると、自分では何もできない人を育ててしまうんじゃないかな…という気はしていますね。今入ってくる学生っていうのは確かに本当にまじめな人も多くって、授業を休まないところもあるんですけど、反面ちょっと精神的な弱さを抱えている学生が増えてきたかな、という気がします。でもそこを余りにもフォローしすぎるのではなく、学生同士の間でそういうのを克服していけるような力も育てていかなきゃいけないのかなと。そういったことを課題として少し感じている昨今です。

古島——私が入った頃の熊大の学生のイメージは、裕福でない家庭の子弟で、多少頭もそこそこ良い、というような感じでした。ところが、今は少子化になって、経済格差っていうのと、学力の差っていうのが出だした。これは随分変わった点で。昔は

親もそんな裕福じゃなかったし、やはり留年したり浪人することに対して、ある程度「これじゃいけない」っていう気持ちがあった。ところが少子化になって、教育にかかる予算っていうのが…まあ医学部あたりが特にそうでしょうけども、ほとんど医者関係しか医学部に入れないような状況を生んで、学生が変わってしまってるんじゃないかっていうのは少し感じています。例えば、着てる物からして全然違う。学生は我々より遙かに良いブランド物を着てるし、我々はその辺の安いブランドものを着ています。それから、携帯を持つようになって、いつも携帯を気にしてますよね。我々の頃は、例えば下宿の人は公衆電話か、大家さんに取次いでもらったりでしか他と連絡とれなかったのが、今は非常に安易に連絡が取れるようになった。だから、すべて安易にできるようになった節がちょっとあって、勉強に対しても妙な錯覚に陥ってるんじゃないでしょうか。だから、先生方がさっきおっしゃってたように、勉強を厳しくやるっていうのが大事。その我々がイメージしてる厳しさっていうのが、果たしてそのとおりの厳しさとして向こうに伝わってるかって思うと、ちょっとそこらへんにギャップが実はあって。

佐田富——それはね、それは1回落ちて、次合格するとわかるみたいです。僕は、授業のとき解いてみせるような問題は試験に出さないんです。ところが学生は、授業やってるとき「先生、どの式覚えればいいですか」って聞くんです。それはセンター試験とかの弊害ですよ。「みんな、この式覚えなさい」って高校まで教えるから。ところがね、そんな教育やったら、「想定外」に対応できない。だから学生には「基本がわかったらどんな問題でも解ける」って言うんですが、学生はそれがなかなか理解できないんですよ。でも1回単位落とす

と尻に火がついて、一生懸命聞くんですよ。うちの学科は一番留年が多くて、3分の1が留年して4年生までに卒業できない。でもそうしないとね、大学はね、社会のためにならないかなと思います。ただし、非常にきついですよ、先生の方が。そんなことやとくとね。だけど、いい加減な学生までどんどん卒業させよったらね、熊本大学の卒業生は世の中で活躍できない。古島——もちろん大学の方も、根本的に変わっていかないといけないってことですよ。その1つは教養教育だと思います。高校から大学に入って初めて出会う「学問」っていうのは、教養教育なので。ところがその教養のところが解体後ガタガタになって、とにかく取っつけ、っていう風になった。

佐田富——本来教養教育っていうのはちゃんと出席しとったら単位を出すものではないんですよ。

大坪——私が今身を置いてる所属先の性質上、授業をまず持つことがないので、なかなか学生さんに触れることはないんですけど、私の恩師の先生とも話をしたり、先生方の話を聞いて、やっぱり学生が、自分で問題を見つけて、それを解決する方法を見つけるっていうその研究の基礎ができてないっていうのは感じます。これをよく考えると、もう全然飢えてないんですね。義務教育じゃないんだから「何しに来たの」って言いたくなるような感じなんですよ。考古学では、私が学生のときには、いろんな海外調査の機会をいただいたんですよ。で、そういうときやっぱり飛びついたんですよ。科研費とか大学の経費で海外に行かせてもらえるって。それだけで貪欲にみんなは食いついてたもんですけど、今は、学生誰も反応しないんですって。それは、自分で行けちゃうからなんですよ。親のお金でも行けちゃうし、バイトすれば

行けちゃうし。とにかく環境がすごく今恵まれてて、学生が飢えてないっていうのを非常に感じる。それと、やっぱり先生がおっしゃったように、インターネットの普及で、ウィキペディアでも簡単に調べられる。本当だったら、語学の1つの単語だっものすごくいろんな意味を持っているのに、電子辞書に載ってなければもう「ない」。「先生ありませんでした」で、終わってしまう。でも本当は、電子化されてる情報よりも、人間がペーパーとして残した情報の方がまだまだ遙かに大きいのに、そこに全然目が行ってないっていう、そういうことやっぱ感じますね。何しに来たのか、勉強とは何か、本当は自分で考えて研究して解決していくっていう、そこがないっていう風には、私の世代でも今の学生を見てて思います。

注

- 1 熊本大学発足当時の理学部は甲・乙に分かれていた。甲類は4年制課程のコースである。一方乙類は、理学部の中に設けられたいわゆる医学部受験コースであり、2年修了の医学部受験に必要な規定の科目及び単位を取得できるというものであった。1954年の学校教育法改正により、医学教育は2年の進学課程と4年の教育課程で構成することに改められ、本学においても1950年に医学進学課程が設置され、理学部乙は廃止された。
- 2 保健管理センター。当時は現在保健センターが置かれている建物の中に、学生課の一部が置かれていた。なお、同センターは2004年の法人化に伴い「保健センター」となった。



第1回座談会の様子

第2回座談会

平成25年7月8日

14:00~16:00

工学部1号館会議室

【第2回出席者】

出口 俊雄 (1949年入学、元理学部教授)
松本寿三郎 (1951年入学、元文学部教授)
小野 友道 (1960年入学、元熊本大学医学薬学研究部教授)
佐田富道雄 (1970年入学、自然科学研究科教授)
今井 輝子 (1975年入学、熊本大学薬学部特任教授)
深町 公信 (1976年入学、法学部教授)
宮瀬美津子 (1977年入学、教育学部准教授)
甲斐 広文 (1979年入学、生命科学部教授)
福本 哲也 (1979年入学、先端研究教育拠点推進ユニット長)
大坪 志子 (1991年入学、埋蔵文化財調査センター助教)

【司会】

古島 幹雄 (1972年入学、理学部長・60年史編纂室副室長)

1. 60年安保の頃

古島——前は各世代の方に、自分が学生時代は自分はこういう学生時代を送って、周りの状況もこんなだったって話をさせていただきました。今回は、最初、せっかくですので小野先生に話していただきます。先生は昭和何年に入学ですか？

小野——昭和35年入学です。昭和35年は安保闘争でした。入ってすぐ、熊大のキャンパスに来たら、まだ角帽が売ってまして、さりげなく角帽買いました。いつの間にかなくなりましたけど。



小野友道 (1960年入学)

1,000円ぐらいだったな。しばらく教養があって、薬学部とか理学部とかと一緒に講義を受けてましたけど、連休前から安保のデモにみんなから誘われて。法学とか心理学とか、なん

か教養の科目よりもデモがずっと面白かったんですね。僕、法学かなんかを落として、次の年、受け直したことがあるんです。それもデモのせいでした。

古島——60年安保ですよ？

小野——60年安保です。それから、あの、鶴屋の前に自民党の県連本部があったんですよ。安保が成立するとき、あそこでずーっと夜中まで座り込みをしましてね。下宿からは、もう出てくれとか言われる。……だったんですが、デモに何回も行きました。ようわかっとらんで行ってるんですよ、もう、一生懸命。正義の味方と思って。

古島——デモは、医学部の学生さん以外にはどういう学生さんが？

小野——いや、医学部っていてもまだ教養でしたから、誰とかなくて。まあ医学部の友達が行くから、俺も行こうっていう。講義がもう少し面白かったら講義受けてたと思う。やっぱり皆、よう遊んでました、その頃は。マージャン組か、ダンス組か、酒飲み。僕はどっちかっていうとマージャ

ンの方でした。

古島——70年安保と60年安保はちょっと違っていたから、恐らく学生さんもね、当時と随分違うんじゃないかなっていうのがあります。先生から見て、70年安保は？

小野——そうですね…どこが違うかといわれたら、難しいですね。まあ最後は自然成立したんですよ。その頃からもうなんかガタツときたことを覚えてますね。それで、僕の教養も終わりだったですね。教養が終わったら今度はものすごい忙しくなりましたからね。

古島——安保の後はもう大学も平常に？

小野——ええ。まあまあ正常でした。

古島——じゃあ60年成立した後と、後はもう普通の、平常の大学生活っていう。

小野——いえいえ、出口のときに、今度は国家試験ボイコットしましたから。

今井——えっ？

小野——医師国家試験を。僕たちの2年ぐらい前から、インターンがどうもいかんと。指導もしないで、金もくれないし。むちゃくちゃだっというこでだんだん盛り上がって、国家試験ボイコットにとうとうなったんですよ。で、青年医師連合っていう過激な団体ができてね。あの安田講堂につながるんですけど。その…東大からもオルグが来たり、僕らもいろいろ行った。厚労省までデモに行ったことも…。結局クラス全体、全体がまとまって、卒業時に、とうとう国家試験ボイコットしました。

佐田富——それは全国的にそんな感じだったんですか？

小野——全国的で、7割ぐらいいたんですよ。

古島——東大紛争も元は医学部の…。

小野——医学部です、はい。だから僕たちは入るときは安保で、出るとき医師国家試験で。僕は、医師国家試験、春・秋とあったんですが、春をボイコットして。でもど

うしようもないんですね、やっぱり親から…。みんなそうです。それで結局、秋受けたんですけどね。今の医学生と違って100%でした、合格率が。それも結局、まあ今となっては少し負けたような感じもあるんですけど、後悔はしてないですね。

古島——当時医学部の学生さんは、出身県ってというのはどういう状況だったんですか？

小野——出身県は福井とか…。関東は少ないんです。関西エリアはだいぶいました。僕も山口から来ましたから。

古島——熊本県出身者ってというのはそんなにはいない？

小野——いや、やっぱり多かった。熊高が20数人いたでしょうか。で、済々黌が5、6人いまして。その2大勢力が強かったです。

古島——当時は、医学部に女子学生さんなんかは結構いたんですか？

小野——女子はね、約1割。80人定員で、1割増やして89人定員。女性が8人だったですかね。

古島——留年生とかどういう？

小野——留年ですか？結局卒業したのは、89人中75、6人でしたかね。成績だけじゃなくて、進路変えた者、病気とかいろいろありますから。

古島——医学部のアルバイトはどのようなものが？

小野——アルバイトはほとんどしてたと思う。僕も家庭教師してました。僕らの頃はイ草刈り取りのアルバイトの募集が出てね…。それから、みんなこの辺に下宿して、黒髪はこの辺で飲んでました。タクシー利用するとかなく、自転車ばかりでした。あとはこの辺でみんなマージャンしてました。

古島——医学部の先生って、昔はよく手術や夜勤のときとかマージャンとかしてたっ

て聞きましたけど。今は知らないですけど。そういうのはあったんですか？

小野——マージャンようしてましたよ。

あ、学生時代ですよ。

古島——パチンコとかは行ってたんですか？

小野——パチンコも行ってましたね。僕たちの同級生はパチンコで試験に遅れたっていうのが1人だけいましたよ。パチンコは子飼の入り口の左にありました。僕はパチンコはしませんでしたけど。

古島——授業なんかで、先生との関係っていうのはどんな。例えば、今だと結構学生さんと…。

小野——あんまりそんな。恐ろしい先生が多かったですよ。

古島——授業の出席とかいうのは結構？

小野——出欠は、授業前後2回とる。解剖の先生なんか2回とってました。五高記念館の一番端の、こっちから行くと右端の校舎で、最後のドイツ語を受けたことも覚えてますね。

ど、入学案内にも「製薬学科は女性には向きません」ってちゃんと書いてありましたね。

小野——へえー、すごいことですね。

今井——書いてあると「向かないんだったら行こうかな」って。で、製薬学科に入ってたんです。そういうことが書けるっていうのがすごいですよ。

小野——それは週刊誌にも載りましたね。

今井——はい。私のちょっと上の人たちが一番大変だったみたいで。

甲斐——だれも製薬会社にも行かないし、

2. 薬学部女子学生規制問題と学生生活

古島——今井先生の頃、薬学部は？

今井——薬学部は女子学生が…私の学年は特に女性が多くて。

小野——あの頃ね、女子学生の規制をしたんですね¹。

今井——そうそう。

小野——今と全然違うんです。

今井——なんか薬学部が女ばかりなので、「女性には向かない」

かな。

甲斐——あー、柳本学長がちょっと言ったんですよ。

今井——それが大きな問題になって。私らの頃は薬剤学科と製薬学科だったんですけど、

女子学生規制問題についての新聞記事
(1966年5月1日 毎日新聞社提供)

みんなが薬剤師になるっていうことがあって。大学の先生にもなる人がいないってことがなんか大学内で問題になって。それで、男だったら少しでも残るって話があったんですね。

古島——今井先生はどんな学生生活を送られたんですか？

今井——うちの学年は特に男性少なくて、7人だったですね。90人中7人男性で、あと全部女性でした。女性が牛耳ってて、薬学部の男性には目もくれない。で、工学部と医学部としょっちゅう合コンやりましたよ。

古島——理学部はあんまり縁がなかった。

今井——理学部はないんですよ。工学部か医学部、かな。そういうのをやる人たちがいて、なんかダンスパーティーがしょっちゅうあってましたね。

古島——ダンスパーティーってありましたねえ。

今井——ダンパの券を毎週のように配って。私たちの頃ってまだアパートじゃなくて、何ていうんだろ、炊事場が1階、1つのアパートに1ヶ所だけあって、トイレもお風呂も共用みたいところで。私は自宅だったんですけど、友達がみんなそういうところに住んでいたの、大体夜中までどっかの家に行って遊んで帰るとい。みんなで持ち寄りってね。

小野——医学部は寮がありましたね。二の丸公園に。



今井輝子 (1975年入学)

今井——医学部の寮？

小野——医学部の寮。陸軍病院の跡に。そこに行ったらそりゃもう「成人教育」はいっぱいあり



学生寮 (医学部)

ましたね。あと、親分がいたりしてね。それから赤痢が流行ったんですよ、医学部の寮で。

今井——すごいそれは大変ですね。

古島——国立病院の所にあったんですか？

小野——今の二の丸公園の所に。で、あそここの二の丸公園で僕たち医学部は運動会をしていたんです。

3. 研究室の思い出

松本——私の頃はですね……それまでの歴史は皇国史観でした。それが、戦後いわゆる民衆史学になる。歴史の対象が違うわけです。で、国立大学が地方各県にできたでしょ。そうすると、そこではやっぱりその地域・地方の研究をやらなくちゃならん。ところが人間がいないわけですね、今までそういうことをやった人がいないわけですから。ですからそういうものを研究しようということになると、材料がまず揃ってないわけです。大学に本ももちろんないし。それで熊大ではどうしたかっていうと、材料を集めたわけですね。まず熊大が始まった時期にやったのが、「松井文庫」の購入。今も図書館にあります。八代の松井家の史料です。それからですね、そういう史料が手つかずで県内各地にありましたので、私たちが入って整理しました。肥後

藩の検地帳の目録を作らなくてはならんというので労働力として学生が入って、昭和29年12月に発行しました。今だったらちゃんと日当が出るんでしょうけどね、その当時は…。

古島——手分けして？

松本——はい。その頃はボランティアなんかという言葉もなかった。それから10年ぐらい経ってからでしょうか、「永青文庫」が北岡にありましてですね。で、あそこでシロアリが付いたり虫が食ったり、スズでやられたりするの…というので緊急避難で、熊本大学に入った。そのときはもう私は大学を出ておりました。その後、今度は、「阿蘇家文書」が入りました、中世の。つまり、こういった地域の史料を大学の図書館で集める、そのはじめに携わりました。最初の頃は学生が否応なしに労働をしていましたよ。なんというのかな、そういうのになにも違和感なくてですね、これが勉強だと思ってやっておりました。でも、それほどはじめにやったのかというとそんなまじめでもなかったです。その頃ダンスが流行りましてですね。映画も観に行きました。ダンスが上手になって、ダンスで大学辞めたのもありますよ、同級生で。

古島——それは昭和何年ぐらいの話ですか？

松本——昭和28年。だから、「もはや戦後ではない」というちょっと前の頃。

甲斐——ちょっと思い出したんですけど、研究とか、実験の話なんですけど。自分は大学院ではハトを使ってたんですよね。そのハトをですね、神社に行き、罝を仕掛けて取ってたらですね、神主さんから怒られてしまったんです。それをやってみずかったからですね、薬学部の構内で罝をまた仕掛けて、隠れとって捕まえて。で、手術して、喉元を開けてちょっと実験して。で、平和の象徴だから、また縫合して逃が

してあげるんですよ。そしたら繰り返されるんですよ、手術したあとのあるハトがまた来て。そういう感じのことがありましたね。自分の先輩がやってたのは脳波の研究で、結構人に近いということでネコをよく実験に使って。そしたら近辺の人たちがそれを知っててですね、庭にネコの罝をと。だから罝を薬学部が届けて、その民家の人がネコを捕まえたら薬学部へ届けて。で、動物舎で飼って。それで脳波の実験をするということをやったりしました。たぶん後もう1つは、小野先生の時代ぐらいになると、実験に使ったウサギを食べてたという…。

小野——いや、僕は食べてないですよ。僕のずっと前は食べてたんですよ、ウサギ。

今井——薬学部も食べてたという話は聞いています。

古島——医学部なんかもそうやって調達してこられてたんですか、ハトとか。

小野——まあ昔はね、その辺の捕まえちゃ実験。で、学生でもトノサマガエルを断頭せにゃいかん。全部自分たちでもって、探してこいて。

松本——習学寮²ではイヌが入るともう駄目、二度と見ないと…。犬はもう鬼門でしたよ、習学寮は。

今井——私たちの時代は動物はもう、実験終わったら穴掘って埋めたりとかしてました。大きな穴が学部へ掘ってあって、そこに使い終わった試薬なんかみんな入れて、燃やして。燃えきるまで周りで遊んで、燃えきったら帰る。で、ときどきなんかわかんないのがボンボンとかいって。

福本——宮瀬先生、教育学部では浅川先生ウナギを使ってらっしゃいましたよね。僕たち、教育学部の事務にいたとき、あれが楽しみですね。実験終わったら、ウナギを食べさせていただけるのが。

宮瀬——毎年ウナギではなくて、浅川先生

は魚の表面の、糖タンパクというのかな、糖の研究をされてたので、お話を聞いただけですけど、医学部の先生とかなんか他学部の先生と共同研究をされてたことで、授業の合間にそういった研究成果をいろいろお話して下さってましたね。一番珍しかったのは、大学院時代に南極の近くで取れる魚を、南極観測隊の方から仕入れたかなんかで、珍しい魚があるんだと。今度はこれのヌルヌルを調べるんだというような話をされてましたね。

4. 大学の国際化

古島——「国際化」って最近言われてますけれども、昔は留学生ってどんな風でしたか？

小野——僕ときは留学生なんかいません。ただ、当時は沖縄が外国でしたから、沖縄の県費と私費で、優秀な留学生が来てましたよ。

古島——医学部には沖縄の留学生が。

小野——はい。特に県で選抜されたっていうのはすごい競争率で、全国の医学部にポツポツと。

佐田富——琉球大学は医学部はなかったんですか？

小野——もちろんありませんでした。

古島——1972年の5月が沖縄復帰。昔は、「国際化」なんてなかったんですね。同年の日中国交正常化の後にはかなり留学生が結構熊本にも来るようになりました。中国からはもうずっと来てますよね。

佐田富——今、僕のところにもいますけど、中国政府の国費留学生だからすごく優秀です。日本国政府が出す奨学制度の2倍くらい倍率が高いとか言っていました。

大坪——私の講座とか、周りではあんまり聞かなかったですね。ただ私が卒業して数

年してからは韓国から3名ほどと、中国が1名いらっしゃってました。

宮瀬——教育学部ではあんまり留学生は見なかったですね。

出口——理学部には、日中国交回復が基になって、一番最初が化学に来ました。昭和55年から2年間、延辺大学…朝鮮族自治州にある大学から。大学の講師でしたね。

古島——世代的に、僕らが若い頃は外国に行きたくても制度がまだ整っていませんでした。今は制度が結構充実してますよね、大学の。

佐田富——日本、日本人がね。

古島——そうそう、そうです。この10年以内ぐらいに結構充実したんだけど、その前まではなかなか日本人が外国に行くっていうのは。行きたいっていう学生はたくさんいたんだけど。

佐田富——今の若い先生方は内向きに見えるんですよ。

古島——そうですね。昔、行けない頃の方がみんな行きたがってて、行けるようになったらみんな内向きになったように見えます。

小野——なんで自分は文部省の在外研究員の順番が回ってこん、とか文句言いよった。

古島——やっぱり憧れていましたけどね、外国に。

佐田富——昔は、順番が来なくても行こうとしていました。だから僕はカナダ政府ので行ったんですよ。日本の待ってたらいつになるかわからないから。

古島——そういうの多かったですよ、違うファンドでっていう。

福本——僕たちの頃は、留学制度じゃないんですけど、3ヵ月とか半年とか働きながら、いわゆるワーキングの制度を使いながら、オーストラリアとかヨーロッパとか行ってる連中は結構いました。だから学生が行く気になって、そういう情報があれ

ば行ったんじゃないのかなと思うんですけど。でも、やっぱり1年間は留年して大学に残んなきゃいけなかったですけどね。

古島——前は英語が上手下手っていうことと外国に行かないっていうのは関係なかったですもんね。

福本——全然関係なかったですね。

古島——今、そこがセットになってる。なんかね「行くにはTOEICで何点とって」とか。

佐田富——たぶん英語が上手になってから行かなきゃいけないんだったら、僕行けなかったですもん。

小野——うん。僕も行けませんでした。

佐田富——行けばどうにかなるかなと。

古島——熊大って結構濃い学生さんがいて、バンカラ気分もあった。それがだんだん内向きになってる。前は「よーし行ってやろう」みたいな人がいたような。

佐田富——そういう気迫のある先生が減ったんじゃないですか。

古島——やはり先生の影響もあるんですかね。

佐田富——うん。若い先生が行くのが当たり前っていう。僕は上の先生から言われてました。留学の経験がなければ、助教授にもしない。最初に助手になったときにそう言われました。

小野——僕たちの時代はね、学問レベルが違って、外国に行かないと話にならなかった。今は逆転してる可能性があるから、行かなくても、ジャーナルをちゃんと書けば。

佐田富——うん、ジャーナルは書ける。ただですね、行って良かったのは、やっぱり自分が留学生を引き受けたときに、話がよくわかるんですよ。何が困るとるかとかね。自分で経験してるから。そういう意味で非常に良かったなあと思いますね。

5. 情報化と大学

古島——もう1つですね、「情報化」っていうのがここ十数年キーワードですよ。

小野——僕らはですね、電話しかなかった。あるいは手紙しかない。卒業の頃にコピーが出てきたんですね。コピーが全部湿って出てくるわけですよ。乾式じゃなくて。ただ学生時代はコピーも全然なかったから、試験が近づくと、誰か僕にノート貸させて言っていましたね。

古島——コピーっていうのが普及したのが70年代の半ばぐらいからですよ。それまではコピーしたら酸っぱい匂いがするやつがあった。

小野——あれは1年置いたらもう読めなくなった。

今井——青っぽいのでね。

小野——決定的に違いますね、今と。

佐田富——今はコピーもとらなくて、携帯で写真撮ってます。

古島——宮瀬先生の頃はもうコピー機使っていました？

宮瀬——はい。試験前になると、コピー機が生協にはあったんで、あそこにずらっと学生が並んだりして…。

小野——あ、もうあったんですか？

宮瀬——ええ。

今井——でも高かったでしょう？

松本——昔は30円だったよね。

今井——30円が払えなかったですもんね。手で書いてましたよ、やっぱり。

宮瀬——男子学生なんか「ノート貸してくれ」とか言ってですね。もうコピーしたらすぐ返してくれる、そんな時代でした。

小野——僕らのときはないだもんね。今井先生のときはないんですか？

今井——いや、だいたい同じ年代だと思うんですけど、みんな書いてましたね。

古島——試験なんかはコピーをとって勉強するっていう時代に。僕らなんか手で写してましたよね。安易に情報が取れるようになって、情報を取るのに時間がなくなれば、勉強する時間がとれるかってそうでもなくて。コピーしてすぐ安心してしまっあと読まない、みたいなのところがあったりして。

福本——僕が昭和61年に事務採用になったときには、まだ学内の文書は手書きでした。鉄筆で書いたものを輪転機で回して、学内文書を。学外文書にはタイピストの専門の方がいらっちゃって。

今井——いましたね。

古島——タイプライターの…動かしてやりましたね。昔は失敗できないからみんな集中して書いてたので、1行1行が非常にこう、重かったですよ。今はだらだら説明してあって、昔に比べて文章が下手だし内容も練られていない。

福本——昔は公文書について勉強する機会があったんですけどね。

古島——手書きで残ってる昔の議事録は、簡潔に、しかも内容がびちって書いてあるので、状況は書いてなくても、見ればわかるんですけどね。

佐田富——今は、何ヵ所かこう見ていったら答え書いてありますよってそういうメールがよく来るじゃないですか。そんなの読む暇のあるやつはおらん。だから「要点は何だ」と思いますね。

古島——カット&ペーストができるようになってから、文章がぐちゃぐちゃ並ぶようになりましたよね。

福本——添付ファイルだとか、URLだとかもう直接貼りつけられるようになりましたでしょう。それつけちゃったら安心しちゃうんですよ。

佐田富——ホームページに飛んで見なさいっていうのがありますね。でも、3回ぐらい行かないとわからなかったりしますね。

編纂室——2000年頃には学生1人ずつにメールアドレスが付与されるようになったんですけども、一方で、その頃にはま



第2回座談会の様子

だ、研究室には例えば研究室ノートがあったりとか、掲示板に先生からの呼び出しが書いてあったりしました。でも、最近はどう皆さん携帯を持って、一斉にメールが来る。先生からの連絡を自分たちでメールを流して連絡を取り合って、直接会わずに話をするとか、そういうことも可能になりました。そういったところで最近変化を感じられることってあるんでしょうか。

今井——薬学部は依然として昔のままの掲示板を活用してます。一人一人にメールで送るとか、そういうことをしてる先生もおられるんですけども、多くは掲示板で。

小野——台風が近づいてきよるっていうときもそれですか。休講になるとか。

今井——大体近くにいますからね。一応メールでも流してると思うんですけど、見てない子の方が逆に多い。

佐田富——今は学生証の番号がメールアドレスになってるんですよ？

今井——そっちを全然チェックしてないんですよ。携帯も自分の携帯の方ばかり見てて。例えば台風とかそういう情報は事務の方から一斉に流していますね。ただ、試験がどうのこうのとかいうのに関しては、やっぱり掲示板に貼って、「落ちた人、何番」とか書いて、で、「何番の人来なさい」とか。

古島——そうやって掲示板でやっていて、昔も今も大きく変わったってことは余りないですよ。情報が



古島幹雄 (1972年入学)

が発達してくると、むしろそっちの方が困る。伝わってない部分が実はある。だからもう携帯だけに頼ってしまうと、なかなか情報って伝わらないですよ。昔の掲示板であった

ら、掲示板に書いてあるんだからかなり大事なことだっていうのがあったんで、みんな見てました。あと、休講ないかって。携帯を持つようになってから、学生さんが情報を選別しないと情報取れないような状況に今なってますよね。だからそういう意味では、確かに昔と違って、情報を発信するツールは発達したけれども、受け取る側がね。何のメールなのかわからないっていうのがありますよね。

佐田富——工学部全体かどうかはわかりませんが、重要なのはみんな掲示して貼ってますね。メールはあてになりません。もう種々雑多ないろんなのが入ってくるから、見ないで消してしまうことが結構多いんですよ。

6. 授業・試験の変化

古島——授業の形態っていうのは、今はパワーポイントとか使ってますよね。ちょっと前だったらOHPかな？で、昔は絵に描いて見せていたんでしょうか。

小野——うん、僕らは全部絵を描いていましたね。

古島——そういう授業なんかのときにはどういう風に？学生に伝達するときに。

小野——僕たちのときは、臨床が近づいたら、「患者供覧」ということで階段教室に本物の患者が「学用患者」として来ていたんです。そこで裸になってもらって、教授が診察して、ここにがんがあるとかいうのをやってもらいました。それは今なくなってます。パワーポイントだとかいろいろありますからね。

古島——パワーポイントが最近出てきましたが、薬学部は？

今井——パワーポイントで講義される先生もおられるし、先生次第ですね。私はもう

板書だけします。ちょっとでも部屋が暗く
なったりすると学生は寝るんですよ。紙を
もらって安心すると完全に寝てしまうの
で、なんにも渡さないで、書いた分だけ。
そこから試験に出す。一生懸命板書してま
すね。

古島——今はWebCTにも載せるとか、非
常に学生に対するサービスが良くなって
いますよね。前は先生が講義ノートを黒板に
ずーっと写してる。僕ね、先生に講義ノ
ートをコピーさせてくれないかって思った
こともあるぐらい。それぐらい何もなかった
時代はありましたよね。当時は先生がもう
昔からの1つの講義ノートをずっと使っ
た時代があって。ところがそういうのが問
題になって、講義の形態が少しずつ変わ
っていったと思うんですよ。僕らの頃ま
ではまだ黒板が中心でしたしね。

小野——黒板中心ですよ。一生懸命書き
よったです。

古島——文系だと先生が読むのをこうず
つとメモってて。だから最近…いつ頃か
らですかね、Webでやるとかパワーポ
イントとか。大坪先生はパワーポイント
とかで習った？

大坪——いえ。これは先生によると思
いますが、恩師はいまだに使わないって
言ってます。もう板書だけでしたね。

古島——小野先生の頃は、講義資料は
学生の頃はないですよ、コピーがない
から。

小野——ほとんど。コピーがないので
から。

古島——ガリ版でこう書くとかなか
ったんですか？

小野——ガリ版…。滅多になか
ったですよ。だからノートがもう本当
の宝でしたよ。

今井——私が学生の頃は教科書が必
ずあって、あと板書されるのと、ず
ーっと話しておられるので、書いて
ないことが出てきますよね、それ
をノートに書いておく。結局その
先生が好きなのが試験に出るの

で。話に力が入ったところ。ちゃんと
それを読み取るというのがありました
ね。お互いにノート見せ合ってたね。

宮瀬——私の頃もそんなに資料はな
かったですね。板書プラス先生の喋
られたことや大事そうなことを読み
取って書いていくっていう感じ
でした。

佐田富——自分の受けた頃はもう
板書ばかりです。ただね、複雑な
図だとかあるわけですよ。それは
板書する先生がものすごく大変な
んですよ。だからそういうのは青
写真みたいなものをあらかじめ配
ってました。今はほとんどの人が
パワーポイント使ってます。

今井——数学のパワーポイントは
難しいですよ。

古島——いや、パワーポイントで
やったら速いですよ。

今井——速いけどついてこれない。

古島——10分ぐらいですみます
ね。

佐田富——それについていけない。
ついていけないから、今は教える
量を減らして、残った時間も別の
指導するんです。演習的な。それ
やらないと駄目。パワーポイント
だけだと全部消化不良になる。

7. 学生の質の変化

古島——期末試験があるじゃない
ですか。

深町——法律系の場合にはですね、
大人数ですから、語学のクラスで
大体まとまるんですよ。で、試験
委員なんかを作って、先にはでき
るののノートを集めるんです。そ
して、試験対策ノートみたいな
のを、ガリ版切って作ってました
ね。一緒に勉強するのはよくあり
ましたね。

大坪——この先生はこういう解答
をしてたらいよいよっていう傾向
と対策みたいな情報はあって。で、
試験が終わった後に自分た

ちで自己採点していました。

今井——みんなでこう話してましたよね。

今、なんか、そういう話が学生の間でないんじゃないですかね。試験終わったら終わってしまっ。

佐田富——学生は横のつながりがないですよ。

今井——過去問が伝わらない。

佐田富——4年生のときに研究室に来て初めて話したとか。そういう学生がいっぱいいますからね。

小野——知らないですね。それは本当ですよ。

古島——前は教養が結構厳しかったのに、学部の方に行って、教養教育の体制が緩んでから、そういうのがちょっと増えたように思うんです。今おっしゃったように、学生の性質も変わった。昔は教養は担任がいて、先生がいて、そこでいろんなことを教えてもらえた。他の学部の人たちと授業が一緒でしたし。

福本——熊大は、もともと教養教育っていうのは「くさび型教育」っていう、いわゆる熊本大学独自の教育の仕方があって。教養教育の一環が1年のときが長くてだんだん専門が多くなっていくっていう。ここで上手く専門教育と結びついて変わっていくっていうのが、教育のシステムとしてもあったし、人間教育っていう意味でもあったのかなと。

佐田富——義務教育から全部つながってる。「これしたら駄目、あれしたら駄目」なんですよ。そんなことやってるから、生活体験として身につけてないんですよ。

古島——最近、昔では考えられないような学生の事故や事件が増えていますよね。学生の質が変わる1つのポイントは、センター試験というのと、共通一次ですかね。共通一次が導入されて、「新人類」と言われる世代がありましたよね。その後セン

ター試験が変わって、法人化になる前に、教養が解体していったっていう。法人化になってやはり、成績の厳格化とかなって、今まで大学の先生がある程度余裕を持ってやってきたところが、成績も含めてキチッと、授業も15回しなきゃいけないってなりましたよね。

小野——昔は休講になったら学生はものすごい喜んだんですけどね、今は喜ばない。15回ちゃんとして、それから試験をしなきゃ、ですからね。

古島——そういうのがだんだん、特に法人化後は厳しくなってきたっていうのがあって。それに伴って学生がついてくればいいんだけど、学生の意識はだんだんだんだん乖離して行って。制度は本来あるべき姿に本当は行ってるんだらうけども。だからその辺が時代区分的には90年代…95年ぐらいまではまだまだ大学が、大学らしかったっていうかなっていう。

大坪——大学時代、楽しかったですよ。先生方もまだ余裕があったので。

古島——いい時代だったっていう風に感じておられる？

大坪——はい、私はそう思ってます。

宮瀬——自分が学生の頃は先生が助手も含めて9名ぐらいいらっしたのに今は6名。で、今、じゃあ私が1年ぐらいモンタナにでも行かせてもらおうかな、と思うと、学科の先生方にも多大な迷惑をかけるのでとても行けないという状況なんですよ。サバティカル制度ができましたけど、誰一人取得してない。その分非常勤の先生を雇うお金もないし、っていうような状況。

佐田富——自分が行ったときは前期と後期と科目を入れ替えてもらったりとかしてましたよ。

宮瀬——そういうのもあるんですけど、公務文書その他も、1人で2つ3つ委員会兼

ねたりするところをお願いしたりするついでですね。

佐田富——今はインターネットがある時代でね、指導しとる学生でもインターネットでもうとことん相談できるんですよ。でも僕らの頃はなんもなかったですからね。それと比べればね、ものすごい楽ですよ。

佐田富——柏木先生³がちょうど僕が学部³の4年のときに、アメリカのパデュー大学に行かれて、その研究室におった学生みんな非常に頑張りました。柏木先生が、普通の学生より1ヵ月前に卒論の原稿出せと言われたんですよ。それで学生が原稿を送ったら、先生は全部添削して締め切りに間に合うように返してくれたと感激していました。だから僕も先生の気持ち次第だと思う。宮瀬——逆にこの、学生の方もなんかこうあんまり海外に行ったりしなくなったな—っていう。

佐田富——それは、子は親の背中を見て育つわけですから。

宮瀬——前は、教養の語学の先生が夏休みになると学生を連れてアメリカに行ったりっていうのもあって。あの当時、今の何倍も円安でした。同級生が大体50万ぐらいとか言っていましたかね、1ヵ月行くのに。で、「成人式の着物はいらないから、その留学費用を出してくれ」とか「自動車学校は自分で行くからなんとか!」って言って、親に借金して行って。でもとてもいい思い出になったみたいです。今頃になって「あーそういうときに行っておけばよかったな」とか思ったりすることがあります。今はあんまり、行くっていう学生を聞かないですね。

大坪——ちょっとした研究会でも行かないですね。私が学生の頃はもうとにかく海外に行けるんだったらそのチャンスをモノにして、その海外の雰囲気とかを学べと、身にちょっと感じてこいと、先生方がおっ

しゃってくださいって。今は学生がもう全然海外に目を向けないですよ。

佐田富——結構ですね、学会関係は学会から学生が行くときの旅費の補助を出したりとかあるんですよ。

小野——今はありますね。

大坪——私たちのときは自分で行くぐらいだったのに…。

佐田富——前はなんもなかったですからね、そういうの。

小野——共済組合からお金を借りたりもしましたよ。

大坪——それでも自分たちで行ったのに、もう今は全然ですね。

佐田富——結局、気持ちの問題ですよ。

今井——薬学部は結構行きたがって行っているとしますけれど。

宮瀬——薬学部は、何か学部で取り組みをされましたよね？

今井——国際奨学金とかですかね？あれはすごくいい制度ですね。

宮瀬——ドイツにも行かれたじゃないですか、何年前に。ドイツとかイギリスとかに視察で。

今井——あー、はいはいはい。

宮瀬——私はNPOの関係で薬学部の学生さんと一緒にドイツへ研修行ったんですけど、その学生さんたちは学部の2年生のときにも自分たちで行ったと。で、3年のときにも、そういうのが学部で企画があったから、また参加したって言われて。夏休み、2年生のときに行ったときには最後1人でずっとドイツの国内をいろいろまわったって女子学生さんがおっしゃったので、あーなんか、こういう人が将来、いろん



大坪志子 (1991年入学)

力を持ってくるんだらうなと思ったんですけどね。女の子の方がタフだなと思いました。

小野——それに今、青年海外協力隊でもですね、行くのはほとんど女性ですよ。びっくりするんですよ。

今井——でも男子学生でも結構ホームステイしたりとか。

古島——ボン大学があるでしょ。私ボンに4年ちょっと住んでたんですよ。見ていてやっぱり女子学生が非常にアクティブですよ。男子学生はあんまり見かけなくて。日本から熊大の学生は何人か来てたと思うんですけども、見て「ああこの子は」って思うのは女子学生が多かったですね。で、ボン大学は熊大と協定結んでるから制度的には整っているけれど、学生が留学するのはなかなかアメリカが多い。ヨーロッパは、フランスとか言葉の問題がちょっとあって、なかなか日本から行かないですよ。

出口——国際学会は？

今井——国際学会にはもう、行きたい子が結構いっぱいいますけどね。

出口——私はまだ大学における頃の話ですけども、国際学会に学生を連れて行ったことがありますよ、自分の研究費でね。ラスベガスで、第4回のフローアナリシスの国際学会が開かれたとき。

8. 学生の住まいと暮らし

古島——学生の住まいですけど、例えば、アパートとかは今、個室になっていますけど。いつ頃から、大体アパートの形態が変わったんでしょうか。今みたいなワンルームマンション風になったのは最近で、前は自炊、共同トイレとか共同浴場、お風呂とかありましたよね？その辺って。

大坪——女子はきれいな1Kのアパートを選ぶ傾向があって、ただ、まだ下宿風なところも残ってました。

古島——今井先生の頃は？

今井——1Kなんか全然なかった時代です。みんな、共同のところばかり。

宮瀬——私は自宅生だったんですけど、友達のところに行くときコンパクトな部屋にトイレもなんでもついて…みたいなのはなかったですね。

古島——下宿代っていくらぐらいだったんですかね、当時。

小野——僕は下宿してたんですが、4畳半か6畳くらい、3食付きで、その頃の相場がですね、月に4,000円かな。

今井——結構高いですね。

古島——授業料はいくらぐらいだったんですか。

小野——いや、1,000円しなかったですね。

佐田富——僕のとときは8,000円でしたよ。

古島——下宿代って、そんなに高くなかったんでしょ？

小野——下宿代で6,000円は非常に高いと皆が言っていましたね。4,000円くらいですよ、3食で。

古島——佐田富先生は下宿してたんですか？

佐田富——半分ずつですね。アパートみたいなところで。アパートっていても、今みたいなワンルームじゃなくて。流しても、トイレでも共同ですね。1万円いかにくらいですね。「神田川」の世界ですね、お風呂屋さんが。授業さぼってもお風呂屋さんに行くと、今日は何やったかとか、宿題が出たかとか出ないかとか情報がわかる。

古島——今って、大体いくらくらいなんですかね？

編纂室——3万～5万くらいですね。

小野——ご飯はついてないでしょ？

編纂室——はい。

古島——部屋だけで、1Kくらいですかね。
 今井——ご飯出てきたら嫌がると思います。
 小野——嫌がるんですね。
 今井——縛られてる気がするんでしょうね。
 大坪——その時間に帰らないといけないし。
 松本——授業料ですが、私たちまでが3,600円ですよ、年にね。その翌年、4期生からは確か、4,500円になったはずですよ。
 小野——僕らが6,000なんぼじゃなかったかな、年間。
 佐田富——私たちの頃は年間1万2,000円ですよ。
 今井——私のとき、年間3万6,000円でした。
 古島——それでも今の10分の1もいかないくらいですね。入学金もそれから上がってしまいましたよね。
 佐田富——授業料は、酒飲んでしまってもどうにかかなりよったですよ、その頃は。イ草のバイトに3日くらい行ったら、大体、年間の授業料払えてましたよ。
 今井——1日1万円くらい。
 福本——国立大学の授業料がですね、昭和

30年で年間6,000円。昭和40年で1万2,000円。
 小野——倍になったんだ。
 今井——3万6,000円はいつからだったんですか？
 福本——3万6,000円は昭和50年ですね。
 小野——3万6,000円、1万2,000円、6,000円。僕は6,000円だ。今とは価値が違うけど、それでも安い。

9. 学生のファッション

編集室——ファッションっていうか、学生の服装についてはいかがでしょう。
 古島——熊大の学生は、僕らの頃はださい。
 小野——僕らは学生服着てましたよ。
 今井——私が入学した頃ってちょうど長いスカートが流行ってましたね。その前がミニみたいで、ツイギーとかいろいろね。その後すぐスケバンみたいな長いのが流行ってね。
 大坪——私の頃も長かった。北の地区はですね、今もなんですけど、教育学部の女子

表1 法人化前の国立大学の授業料改定年と金額(円)

年度	入学料	授業料	総額	年度	入学料	授業料	総額
1949	200	1,800	2,000	1987	↓	300,000	450,000
1950	400	3,600	4,000	1988	180,000	↓	480,000
1952	↓	6,000	6,400	1989	185,400	339,600	525,000
1956	1,000	9,000	10,000	1990	206,000	↓	545,600
1963	↓	12,000	13,000	1991	↓	375,600	581,600
1964	1,500	↓	13,500	1992	230,000	↓	605,600
1967	4,000	↓	16,000	1993	↓	411,600	641,600
1972	12,000	36,000	48,000	1994	260,000	↓	671,600
1975	50,000	↓	86,000	1995	↓	447,600	707,600
1976	↓	96,000	146,000	1996	270,000	↓	717,600
1977	60,000	↓	156,000	1997	↓	469,200	739,200
1978	↓	144,000	204,000	1998	275,000	↓	744,200
1979	80,000	↓	224,000	1999	↓	478,800	753,800
1980	↓	180,000	260,000	2000	277,000	↓	755,800
1981	100,000	↓	280,000	2001	↓	496,800	773,800
1982	↓	216,000	316,000	2002	282,000	↓	778,800
1983	120,000	↓	336,000	2003	↓	520,800	802,800
1984	↓	252,000	372,000	2005	↓	535,800	817,800
1986	150,000	↓	402,000				

↓は金額に変化がないことを示す。

学生は非常に華やかで、文学部は地味で、法学部は少し違うってことで、女子の見分けがつかよねって話を今の学生ともしてたんです。教育学部の学生の女子は本当に華やかで、お化粧品もばっちり、なイメージがあるんです。文学部からしたら、で、文学部は本当に地味。私は特に考古学なので、泥臭いので。そんな感じでした。

深町——我々の頃はですね、法学部に女子学生がもう2人ぐらいしかいない時期ですから、とにかくさかかったですね。綿入れ丹前を着て女子学生が授業に出てたようなこともありましたから。

古島——ジーンズが変わったんですね。

70年前後はジーンズの下がラッパみたい。

深町——そうですね、ベルボトムでしたね。

古島——ジーンズが変わると、髪型もね。

70年前後はロングヘア。なんか高校のときは坊主だったから、大学にきて反動でみんなロングヘアになって。髪の毛を染めるのはずっと後ですけどね。服装が確かジーパンと綿のシャツとかTシャツとかそういうのが主流。70年代は大体その辺かな。で、80年代になってちょっと変わってね。男子学生も女子学生もカラフルなファッションになってきたのと、髪型が変わってきましたね。70年代の髪型はおかっぱ頭の人が結構多かったんだけど。あと、昔セシルカットっていうのが。

小野——松本先生の頃も学生服ですか？

松本——学生服です。…いや、はじめの頃は学生服が足りなくて、軍服着とったりしてましたよ。2、3年は。

福本——軍服。

松本——で、4年生になって出る頃には、就職試験なんかは学生服着て行きましたけどね。軍服がまだ残ってましたね。

古島——最近ワンピースの学生って見ないですね。

今井——昔はほとんどワンピースでしたね。

大坪——ワンピースはいないですね。

今井——昔はジーンズ穿くかワンピースみたいなのが着てました。

宮瀬——確かに教育学部は男女比のバランスがいいので、お互いに意識する面もあるかもしれない。男の子も最近おしゃれですもんね、教育学部。

大坪——そうなんです、教育学部は華なんですよ。北地区ではそう思ってます。

宮瀬——ヘアスタイルだとか、男の子もちょっとこだわってるような気がします。

今井——薬学部は今もださいので、「黒髪は違うよね」って学生が言ってます。黒髪行くとき、「黒髪行かなきゃ」っていっておしゃれしてました。

佐田富——でも黒髪でも南と北でだいぶ違いますよ。

古島——70年前後は確かにおしゃれとは言えなかった。灰色のスカートにね、紺色のブレザーみたいな。まあ、高校の制服みたいなのが主流で…。

古島——僕らの頃は無地が多くて。それがだんだんカラフルになってきて、いろんな模様が入ってきたりだとか。で、持ち物です。ブランド品を持つ者が増えた。

今井——ブランド物ってなかった。

大坪——いや、私も持ってなかったです。

佐田富——古島先生が入ってきた頃は下駄履いてる者はいました？

古島——1人か2人ぐらい。



1970年代の学生の様子

佐田富——1人か2人ね。僕らはもう下駄は多かったです。

小野——多かったですね。

佐田富——下駄履いて奨学金もらいに行ってた。

古島——女子学生の服装が変わると、やっぱり男子学生もそれに合わせる。やっぱり女子の学生の方が流行に関しては非常に敏感で。バブルの頃から服装が派手になって、この頃がひとつの転機かなってというのは感じますね。

出口——ショートスカートは何年ぐらいですか？私、44年にこっちに帰ってきたときにもびっくりしましてね。

今井——かなり短かったですね。

古島——恐らくね、僕らの頃はジーパンとかネルシャツとかそういうのが普通で、むしろ無地系のものが多かったですもんね。

どっちかというと地味だったですよ。学園大とか行ったら全然違ったですよ。今の教育学部の1つ上ぐらい行ったのかなというぐらい、学園大の方がおしゃれでしたね。

編纂室——最後に1つだけいいですか？

今、ファッションの話がありましたけど、ファッションが派手になっていくっていうのと学生の質の変化は関係ありますか？

佐田富——そう言われるとそうかもしれないですよ。もうちょっと他に考えることがあるんじゃないかっていうようなことが。

編纂室——学生が使えるお金ってありますよね。それを勉強につき込むお金と、ファッションとかにつき込むお金の比率っていうのはだいぶ変わったのではないかと思います。

古島——月々の小遣いの中で勉強に関するものにどれくらい使っていたのかっていうのは、時代によって違ってたかもしれませんが。小野先生の頃って大体、例えば月いくらぐらいの生活費って、家賃とか払ってその中で学習とかそういうことに必要なも

のっていうのは…。

小野——僕らは教科書が高かったんですよ、医学部の教科書が。それを買うのは別にもらわんとやっていけなかったですね。あとは飲み代とかね。

古島——ノートとかはそんなに高くなかった？

小野——それは安かったですね、ノートとかは。

今井——私も教科書高かったです。

小野——ね、教科書が高いんです。

今井——今の学生は教科書買わない。

小野——買わないでいいんですよ。

今井——PCで出てくるから。

深町——文系の学生は本買うのが当たり前って感じが我々の頃はあったんですけど、最近は教科書でも買わないですし、普通の本も買わない。

古島——文庫本とかもね、ああいうやつも買わない。

深町——本持っていてなんぼっていうような……法学部なんかだと、ずらりと本を揃えるのがかっこいいっていうイメージがあったんですけど、最近そういうのいっていいですね。

古島——エンゲル係数が今の方が。昔は食うことがほとんどで。

佐田富——貧しかったですもんね。工学部の場合はね、最近また違いますよ。前はそれぞれの学科で、学科ごとにですね、なんとか実習とかあったんです。その実習用に1年生のときに服作るんですね、ジャンパーみたいなやつ。それ着てるのが普通だったです。そんな無駄な金使えない。制服みたいなもんですよ。で、それに下駄でも履いときゃ、なんとなくあの学科の学生だなんて。で、中身で勝負する。外側は関係ない。

古島——熊大…地方の国立大学っていうのはあまり裕福でない家庭の子息が来るところで。多少頭が良かったから、お金が国立

だったら安いから、行けって言って。で、70年代頃から授業料が国立大学ばーんって上がってね、必ずしもそうじゃなくなっただっていうのはありますよね。

佐田富——その辺が大いに影響してるんじゃないですかね。

注

- 1 1966年4月、柳本武学長が、年々増加傾向にある薬学部の女子学生に対して制限を加えることを考えている旨の発言がなされた。また、同年に作成された昭和42年度学生募集要項では、願書中に「女子学生は薬学部製薬学科はなるべく第一志望にしないよう」但し書きがつけられた。翌年2月に入試が行われた結果、製薬学科の女子学生は減少したものの、製剤学科は初めて合格者全員が女子となった。
- 2 五高時代から続く学生寮。現在の文法学部棟付近に建っていた。
- 3 柏木潤工学部教授。1994年4月1日から1996年3月31日まで大学院自然科学研究科長を務めた。

あとがき

本冊子は、熊本大学60周年記念事業の一環として行われた『熊本大学60年史』編纂事業の中で開催した座談会についての記録である。

もともとは本書と同時刊行である通史編に、特論「学生生活の時代相」というテーマの論考を掲載する予定であったが、執筆者の都合により掲載が困難となった。しかし、大学の歴史の中に、学生生活について触れる項目が全くないというもおかしな話である。そこで、熊本大学出身の教職員（退職者も含む）による座談会に切り替え、これをもって本学の学生生活の一端を記録にとどめることが企画され、本冊子を刊行することとなった。通史編本編と別冊にしたのは、座談会の持つ性質上、歴史資料に基づき記述するという本編の趣旨とやや異なるためである。

座談会開催にあたっては、開学当初から近年の卒業生までなるべくまんべんなく座談に参加していただくこと、また、出身学部や教職員として所属している部局、ある

いは男性と女性では学生時代の過ごし方が異なるであろうことから、これらの重複がないように配慮したつもりである。本座談会で語られた学生生活は、ご参加いただいた皆様の体験した一部にすぎず、また、当時の学生生活のすべてを記したものではない。しかし、各時代を体験した方々による、生々しいお話を伺うことができた。ページ数等の制約もあり、本冊子には収録できなかった部分も多々ある。本冊子あるいは実際の音声データが、本学の歴史の一端を伝えるものとして活用・保存され、また、今後もこうした取り組みが継続され、熊本大学で過ごした方々の記憶が後世に継承されていくことを期待したい。

最後になったが、本企画の趣旨を御理解いただき、お忙しい中にもかかわらずご参加いただき、貴重な体験を語ってくださった座談会出席者の皆様に改めて深く御礼申し上げます。また、本冊子を別編として刊行することに同意いただいた編纂委員会委員の皆様、谷口学長にも深く感謝する次第である。

編集担当 上野平 真希(熊本大学60年史編纂室特別研究員)
編集協力 松藤 典生(元熊本大学学術情報総主幹、元60年史編纂室員)
竹内 太郎(熊本大学60年史編纂室事務補佐員)
川口 紗央里(熊本大学文学部)

表紙：熊本大学事務局本館（旧熊本工業専門学校本館）

本建物は熊本大学の前身校の一つである熊本工業専門学校の本館として利用されていたが、熊本大学発足以後は現在に至るまで大学の事務局本部として利用されている。

1924（大正13）年に竣工した初期の鉄筋コンクリート製の建築物であり、1998（平成10）年に国の登録有形文化財に指定された。

熊本大学60年史 別編

特別座談 学生生活の記憶

発行日 2014年3月3日

発行 国立大学法人 熊本大学

編集 熊本大学60年史編纂委員会

印刷 株式会社ぎょうせい

